

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

地域イノベーションを推進する 三重創生ファンタジスタの養成 キックオフ シンポジウム

2016.1.23

報
告
書

COC+大学 三重大学

目次

| | | |
|---------------------|--|----|
| ○ はじめに | 三重大学教育担当理事 山本 俊彦 | 1 |
| ○ 開会の挨拶 | 三重大学長 駒田 美弘 | 2 |
| ○ 知事よりビデオメッセージ | 三重県知事 鈴木 英敬 氏 | 3 |
| ○ 来賓の挨拶 | 文部科学省 永田 昭浩 氏 | 4 |
| | (高等教育局 大学振興課大学改革推進室 課長補佐) | |
| ○ 事業説明 | | 6 |
| ○ 基調講演 | | 9 |
| | 「地方創生と COC+事業の意義と期待」 | |
| | 講師 納谷 廣美 氏 | |
| | 前明治大学長、大学基準協会特別顧問 | |
| | 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業選定委員会委員長 | |
| ○ パネルディスカッション | | 15 |
| | テーマ：「三重県における地方創生を考える | |
| | ～これからの三重県が必要とする人材とは～」 | |
| | ファシリテーター：雲井 純 | |
| | 三重大学地域活性化推進コーディネーター | |
| | パネリスト： | |
| | (学識経験者) 納谷 廣美 氏 | |
| | (自治体) 鈴鹿市長 末松 則子 氏 | |
| | 南伊勢町長 小山 巧 氏 | |
| | (企業) 株式会社光機械製作所 代表取締役社長 西岡 慶子 氏 | |
| | 万協製薬株式会社 代表取締役社長 松浦 信男 氏 | |
| | (学 生) 三重大学人文学部4年 山下 莉奈 | |
| | 三重大学生物資源学部4年 井上 瞬 | |
| | (卒業生) NIT株式会社 田口 秀典 氏 | |
| | 株式会社マスマグループ本社 山本 豊 氏 | |
| ○ 閉会の挨拶・おわりに | | 36 |
| ○ 当日の様子 | | 37 |
| ○ 関係資料 | | |
| | 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+） | |
| | 「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」に係る協定書 | 38 |
| | 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）概要 | 43 |
| | キックオフシンポジウムアンケート結果 | 47 |
| | 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）新聞記事及びチラシ | 49 |

只今より「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）キックオフシンポジウム」を開催させていただきます。長時間になりますが、よろしくお願いいたします。

私は、本日司会進行役を務めさせていただきます山本と申します。よろしくお願いいたします。現在、三重大学で教育担当理事を務めさせていただいておりますが、本事業の実施責任者という大役も仰



せつかっており、これから5年、難事業を進めていくということで緊張しておりますが、その最初の事業でありますので、皆様の協力を得て成功裡に終わりたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

今日は、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業、タイトルは「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」のキックオフシンポジウムにご出席いただきましてありがとうございます。また、基調講演をお願いいたしました納谷先生、また、パネルディスカッションをお引き受けいただきました皆様方にも厚く御礼申し上げます。



この事業はオール三重県で推進していく事業であります。地方創生を推進していく上で極めて重要であり、また極めて効果の大きい事業であると私は認識しております。加えまして、本事業では三重県内への就職率のアップやインターンシップの推進に関して明確な数値目標が掲げられております。本日のシンポジウムでは、この会場におられる皆様方全員で、三重県における地方創生についての課題、あるいは必要とされる人材について改めて考え、共通の認識を持っていただければと思っております。また、本事業がスタートするにあたり、単なるシンポジウムではなく、意気を高め合うような決起集会にさせていただければと思っております。三重大学としましても、今日ご出席になっておられます多数県下の企業の皆様方、また、パネリストをお願いいたしました鈴鹿市の末松市長様、南伊勢町の小山町長様をはじめ、県下 29 市町の皆様方、それから三重県内の高等教育機関の皆様方とスクラムを組んで、不退転の決意でこの事業を進めて参りたいと思っております。

本日、三重県鈴木知事様は台湾へ出張になっておられるということで、元気なビデオレターを頂戴しており、また、文科省からも大学振興課大学改革推進室の課長補佐、永田様にも応援に駆けつけていただいております。

また、この 1 月 18 日月曜日には、三重県議会の議員勉強会におきまして、議員の皆様 51 名全員の前で 90 分間程「地方創生と三重大学の役割」というお話をさせていただきましたが、その場でもたくさんのご質問をいただき、大きな期待をいただいているということを実感いたしました。本日ここにおられる皆様方には、この COC+事業のコアとなっただき、ご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げたいと思っております。

最後にこのシンポジウムがより良いものとなることを期待しまして、始めのご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

知事よりビデオメッセージ

三重県知事

鈴木 英敬 氏

皆さん、こんにちは。三重県知事の鈴木英敬です。本日は海外ミッションのため、今回のCOC+キックオフシンポジウムに参加できずに大変申し訳ありません。

今回のCOC+の採択にあたりましては、三重大学さん、そして一緒に取り組んでいただいている県内高等教育機関の皆さん、そして企業・団体の皆さん、すべての皆さんのご尽力の賜物だと思っています。

改めて御礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて、この地方創生の中で大きく課題となっている社会減の対策。三重県においてはご案内のとおり、だいたい最近だと毎年3千人ぐらい社会減が続いているという状態です。加えて、特に若者の社会減は深刻です。大学に進学をする時、県内の高校の大学進学希望の約8割が県外に出て行ってしまいますし、就職する時も県内の大学の就職希望者の約5割が、県外へ出て行ってしまうという大変厳しい状況であります。そこで、この学ぶ場、それから働く場をしっかりと学生、高等教育機関、そして企業が繋がって魅力あるものにしていこうという今回のCOC+は、まさに時宜を得た大変有意義な素晴らしいものであると思っています。特に今回はその働く場につきましては、この県の産業政策の方向性「食と観光」、「次世代産業」、「医療・健康・福祉」という3つの分野で人材を育成していこうということで、我々の産業政策の方向性と合致しており大変ありがたく思いますし、企業の皆さんも参加しやすい、あるいは注目しやすいものになっていると思っています。そして大変ありがたいと思っているのは、今回の目標です。大学卒業生の県内への就職率を10%上げようという大変野心的な、チャレンジングな目標を掲げていただきました。これはこの5年間で300人、県内で就職する人を増やさなければならないという大変挑戦的な取り組みでありますけれども、今回のCOC+を一つのキックオフとしながら、関係機関が協力すれば必ずできると思いますし、県としてもしっかりと皆さんと連携して取り組んでいきたいと思っております。

そして最後になりますが、伊勢志摩サミットまで残りあと124日になりました。伊勢志摩サミットについてもオール三重で取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、本日のCOC+キックオフシンポジウムが有意義なものとなること、また本日お集まりの皆さんの、また各機関のご発展を心からお祈りしまして、私の挨拶とします。本日はどうもありがとうございます。



来賓の挨拶

文部科学省 高等教育局 大学振興課大学改革推進室
課長補佐 永田 昭浩 氏

ただいまご紹介をいただきました、文部科学省高等教育局大学振興課、課長補佐をしております永田でございます。本日はお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

本来であれば、当方の大学振興課課長の塩見がここに参りまして、皆様に直接ご挨拶をさせていただくところでございますけれども、ほかの会議もございまして、こちらに来ることがで



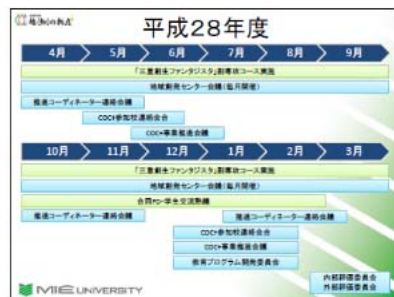
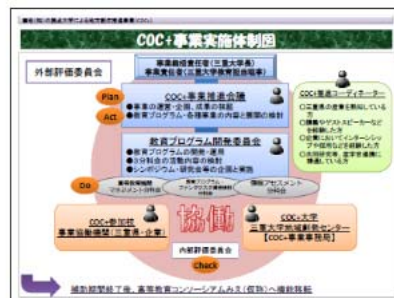
きませんでした。そのため、私が課長からのご挨拶を、代読させていただきたいと思っております。

「本日は、三重大学主催の地（知）の拠点大学による地方創生推進事業 COC+キックオフシンポジウムが開催されますことに、心よりお慶びを申し上げます。本シンポジウムの開催にあたり、駒田学長をはじめとする三重大学の皆様や参加大学の皆様へのご尽力に敬意を表します。また、日頃から高等教育に関しご理解とご協力をいただいております、三重県をはじめ関係自治体の皆様、産業界等の皆様に深く感謝を申し上げます。我が国は今、活力に溢れた地方の創生を目指すということが急務の課題となっております。今後の地方創生を担うのは若者であるということ言うまでもありません。しかし、地方の若者の人口流出、これは大学入学時と大学卒業、就職の時点に集中しているということが課題となるところでございます。その三重県の未来を担う若者の育成をする主役は、大学、短大、高専といった高等教育機関であります。地域でどのような人材が求められているのかを的確に把握し、地域の発展を担う人材を育成すること、これは地域の知の拠点である高等教育機関の使命であり、地方の高等教育機関は、都市部の大学等以上に若者にとって魅力のある存在になることが求められているということでございます。文部科学省では平成 25 年度より全学的に地域を志向した地域の知の拠点「センター・オブ・コミュニティ」となる大学を支援する COC 事業を進めておりますが、本年度からは更に発展をいたしまして、地方創生のために自治体や産業界等とともに協働して学生の地元就職率向上、雇用創出に貢献する取り組みを重点に支援する COC+事業を改めて再スタートしたところでございます。三重大学をはじめとする大学等の取り組みにつきましては、三重県内に所在する全ての高等教育機関が参画し、それらに自治体、産業界を含めまして、県内全域を網羅的にとらえた協働体制がしっかりとできている、ということが評価され、この度 COC+として採択をされたところでございます。昨秋より COC+として全国 42 の地域、256 もの大学・短大・高専が動きを始めている

ところでございます。COC+が目指す成果には各方面から本当に大きな期待を寄せられておりまして、地方創生が進める社会全体が注目をしているところでございます。本日もご臨席の中には、三重大学をはじめ COC+事業の採択校として、または連携校として取り組んでいただく大学等の皆様も多数ご出席をさせていただいていると存じます。それらの大学等の皆様におかれましては、これまでの取り組みを一層発展させ、人口減少や超高齢化といった地域が直面する課題に対して産学官金が一体となって連携しながら、地域創生の担い手となる人材を輩出するモデルケースとなり掲げられました数値目標の達成に向けて、着実な成果を挙げていただきますよう心より期待をしております。また、三重県をはじめ関係自治体の皆様と産業界の皆様、この COC+事業の目標でございます地元就職率の向上、または雇用創出というのは、大学の努力だけでは達成できるものではないというふうに思っております。皆様の厚いご協力が不可欠であります。今後とも、協働して一緒に取り組んでいただきますよう、ご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。結びに本シンポジウムのご盛会とご臨席の皆様の益々の発展を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。平成28年1月23日、文部科学省高等教育局大学振興課長、塩見みづ枝。」

以上でございます。塩見同様、私もこの事業担当者として、皆様の取り組みに大いに期待をしておりますので、心より本事業の成功を祈念いたします。ありがとうございました。

しては、三重県と事前にさまざまな観点から協議を重ね、その方向性、具体的な展開、狙い等を検討してまいりました。



(P.45~P.46 掲載)

三重県では 2000 年以降、大学進学時の人口の流出過剰現象が続いております。これに対して、高等教育機関の魅力向上など、学びの場を中心とした若者の県内定着に向けた各種の取り組みが期待されているということでもあります。さらに雇用の創出、若年層の県内就職率の向上に繋がる持続可能な産業開発として、「食と観光」の分野、「次世代産業」の分野、「医療・健康・福祉」の分野で捉え、総合的な戦略の策定が課題になっているということでもあります。

本事業はこうした三重県の施策や課題と連動・連携しながら、地域の持続的な活性化や地域創生に繋ごうとする事業ということが言えます。また一方で本事業は、大学の教育カリキュラムを改革するものでありますが、三重大学では、三重県に根付き、地方創生を成し遂げるエンジンとして活躍する人材、また「食と観光」、「次世代産業」、「医療・健康・福祉」の 3 つの分野をリードできる人材を育成するために、「地域志向科目群」、「地域実践交流科目群」、「地域イノベーション学科目群」、この 3 つのステージで構成する三重創生ファンタジスタ資格認定の副専攻制度を立ち上げ、平成 28 年 4 月より全学的に展開を進めていこうと考えております。こうした事業の企画と実施にあたりまして、県の行政担当者の方や企業の方々にご参加いただきながら、産官学連携による教育プログラムの共同開発、共同運営を進め、また先程申し上げました 3 つの産業分野で、それぞれ必要とされる人材の育成に直結するような、教育内容あるいは教育の方法を模索して進めていきたいと考えております。

また、この COC+事業の推進にあたりましては、COC+推進コーディネーターの役割が重要視されております。三重大学におきましては、この推進コーディネーターを「地域活性化推進コーディネーター」と呼び直し、三重県の地理的特徴を踏まえて 6 人の方をお願いする

ことにしております。コーディネーターの方々には、地域志向科目を担当していただき、地域でのキャリア教育や就職に関する相談、それから地域と連携した研究推進等の中核的存在を担っていただき、活躍をお願いしたいと考えております。

本事業は、事業協働地域のさまざまな機関や団体が一丸となった取り組みであることが大きな特徴ですが、県全体で見ると平成26年度から皇学館大学様と四日市大学様でCOC事業が採択され、地域人材育成を展開しておられます。既に先行されているCOC大学、それから今回のCOC+に参加していただいている大学や高等専門学校、三重県、そして企業および企業連合体の皆様から、案を出していただき、COC事業との関連や調整を図りながら、三重県の地域創生あるいは持続的活性化のエンジンとしての人材を育成するためのさまざまな事柄について検討する、あるいは方針を決定するという、本事業の統括にあたるCOC+事業推進会議を組織して展開しようと考えております。この会議については、本日の午前中、第1回目を開催させていただきました。

さらに、このCOC+事業推進会議の下に、教育プログラム開発委員会を設けて、三重県という特定の地域あるいは産業に特化した問題や課題を浮き彫りにしながら、その課題に応え、解決策を探る実践をどのように考えるか、進めるかというような産業領域に応じた検討を、この教育プログラム開発委員会で進めていただくこととしております。この2つの会議、委員会を中核にしながら、県全体としての事業の展開を進めていこうと考えております。

平成28年度、2年目になりますが、4月から来年3月にわたり、こういった会議を位置付け、いくつかのイベントを企画しながら、進めて行こうと考えております。時間の関係もあり、極々簡単な説明になりましたが、これらのことを事業協働機関の皆様方と一体になって、丁寧に準備を進めながら、しっかりひとつひとつ確実に進めていきたいと考えております。文科省からの予算補助期間は5年間ですが、6年目、7年目と展開する事業でもありますので、何卒ご協力、ご支援、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。以上、本事業についての説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

「地方創生と COC+事業の意義と期待」



地（知）の拠点大学による地方創生推進事業選定委員会委員長
公益財団法人 大学基準協会 特別顧問 納谷 廣美 氏
(前明治大学長)

過分なる紹介をいただき恐縮しております。本日すべての新聞で、首相が施政演説において発言した「地方創生への挑戦」を具体的に掲載しております。今の安倍内閣では、地方を強くしないと日本がもたないということで、大きな政策の一つとしてこれを入れていることは事実です。まさしくそういうひとつひとつの小さな塊が、ひとつずつ力をもって日本全体を支えていることだと思っております。そういう支えに乗っかって、先端的なところが動き始めるということが日本の力になっています。安倍内閣がどこまで存続するかは分かりませんが、いずれにしても、このように政策誘導がなされており、文科省もそれに従っていろいろな動きをしております。そのような動きとの兼ね合いをお話しながら、レジュメに沿ってお話させていただければと思っております。

はじめに

(教育の質的転換)

「教育の質的転換」と教育改革の話を、まずいたします。皆さんから見ると当たり前のようですが、時代とともに教育の内容や質が変わってくる。明治維新の時代には中央集権の主導のもと、海外の近代国家との間で早く自分たちが追いついていかなければならないと考え、「近代化路線」を進めるために、国は大学を作って、エリートをどんどん育て上げて日本を引っ張ってきた。この事実はお分かりだと思います。間違いなく、そのような時代変化で影響を受けるのが高等教育です。それから、GHQによる戦後改革になってアメリカ型の社会、民主主義政治というのでしょうか、平和を願った社会を作ろうと、全ての価値観、パラダイムが変わり、大学もまた変わってきたということも事実だろうと思います。そして皆さんご存知のように、戦後 70 年は去年のことですけれども、近代化路線をどんどん進めて行く

中で、1970年代たとえば四日市で大気汚染がありました。要するに、いろいろな分野でビッグバンが起き、社会の在り方を変えていかなければならない事態に陥っている。今日ようやく新しい方向に向かおうとしている。社会を変えていくためには、新しい価値観をもった人を育てなければならないわけですから、教育も従来通りとはいかない。

（社会の質的転換）

現代は、一部手直しすれば何とかなるという時代がもう終わり、次のところへ目を向けて社会を改革しなければいけない時代に入ってきている。戦後の高度経済成長時代のように大量生産、大量消費して力を付けてきたというやり方は、もう限界に来ています。自動車を欲しいと言っても2台も3台も要らないわけです。そのような状態で、例えばテレビや洗濯機など、昔3種の神器と言われていたものは、もう、すべての家庭に行き渡っており、今更社会を引っ張るほどの需要が生まれてきません。近代化路線という考え方、物を作って何かしようという考えそのものの具現化が、なかなか難しくなっています。そうすると、この日本の社会はどうなっていくか。より高質でより個性的なものを少しずつ探していく中で、独自のものを売り出すということをしないと力が出てこないということです。そういう時代に関心が移り変わっている。そういうことが、まず一つです。もう一つは、とても大変です。先程、少子化の話が出ました。人口論的にいうと65歳以上の人が総人口の7%を超えると高齢化社会といい、14%を超えると高齢社会だと言っております。この高齢社会は、日本では1994年に既に到達しています。今さら高齢化社会だとか、高齢社会だとか言っているのはおかしい。本来ならば、その時に対策を練っていて今日を迎えなければいけなかったはずですが、今頃になって、こういう議論がされている。もっとはっきり言いますと、18歳人口の問題もありますが、大学を経営する方から見ると18歳人口がいつの時代になったらどうなってくるかというのは、もうわかっていたわけです。しかし誰も手をつけなかった。そのツケが今来ている。また、皆さん日本の人口は1億2千前後ですけれども、1億超えたのは何年だかおわかりでしょうか。1960年頃です。その頃になってやっと1億人に達しました。1億という数を今政治的に議論していますけれど、その1億という数がまた戻ってくる時が何年か。2024年と予測されています。こういうこともやはり我々はきちんと押さえておく必要があります。もうそれほど遠くない。国の政策として、1億という総人口が適正なのか。他の国の人口と比べて考えなければならない。明治維新の最初の頃、3000万人台でしたが、それでもあれだけの近代化のエネルギーが出たということは、何かがあるということなのです。そうすると、人を育てるということは、どういうことかということも、やはり現代化の視点の中で抜本的に考えなければならない。

一方で、今世界がどうなっているか。このことも我々は知っておかなくてはならないと思います。1991年にソ連がなくなって、アメリカ指導の体制にすすむ。このことは、国際社会にとって決定的な出来事です。「アメリカによるグローバル化」は、言葉の理解によっては、アメリカが自分の文化と言葉で世界に共通のものを作り上げるという意味でもある。そうすると、いろいろと違う文化の人たちは、それに応じられないとなるのは当たり前です。それがはっきり出たのが、アメリカにおける同時多発テロ。2001年のことです。これで間違いなくその兆しははっきりと見えたわけです。またリーマンショックにおいては、アメリカが金融という体制を作った世界で、あのような事件を起こしてしまい、それが金融会社だけの間

題でなく、その国の経済実体が大変なことにしてしまうことが起きた。これは、アメリカが作り上げた世界的な金融体制が崩れたということです。それをこれからどうやって立て直すかという話であり、もっとはっきり言うと、G8とかG7などと言われてはいますが、今もうGをつける国にアメリカがひょっとしたら入らないのかもしれない。そういう時代に入ってきている。もちろん力はあるのですが、昔のようにアメリカは、すべてを統治していくことができない。その一つがBRICSで、ブラジルやロシアなどですが、次の後進国グループも台頭してきている。そのようなグループに追い立てられ、せめぎ合いをしております。その動きは、世界は今アメリカだけではありませんよと、世界の人びとに見せつけている。後進国が次々として出てくる時代です。国際社会は、ある意味でフラット化している。もう誰かが仕切れというだけではできない時代に入っていると理解してください。

そういう中で私たち日本人がしっかりと自覚したのは2011年3月11日の東日本大震災、これで初めて地方に我々はどんな力を持っている組織を作らなければならないかということをはっきりさせたわけです。それは物だけではだめで、人間の繋がりやいろいろなことが絡まって社会が成りたっていないと強くなれないと。日本の良さはこういうところにあると、世界にも示すことができました。こういうことをきちんと理解しておかなければならないと私は思います。

大学COC+事業の意義

(大学COC事業との関係)

次に、「COC+事業の意義」について。先ほど山本理事から話がありましたけれども、その前にCOC事業というのがあり、実は私そこでの採択審査、ヒアリングをしておりました。そこで明らかになったことがあります。それは三重大大学だけの問題ではなく、日本全国の地方にある国立大学が共通に持っている体質の問題です。もっとはっきり言うと、県ごとに国の政策として国立大学を作ったにも関わらず、県とのつながりが切れてしまっている。むしろ東大等が行っている教育研究と同じ目線で大学運営を行わなければならないと思っている。均一的に同じことをしないと、国立大学ではないということになってしまっている。個々の先生や個々の研究グループはしっかりとやっています。けれども、組織としての大学がしっかりと地域に根を下ろして、きっちりと教育研究をやっているぞということをアナウンスできていない。このように私には映りました。何のために、この小さな日本に、それぞれの県ごとに国立大学を作ったかと言えば、教育の均衡や、東京に集中してはいけないということで、いろいろな規制をかけられたからです。明治大学もご存知の様に東京のど真ん中ですから、いろいろな規制を受けて建物なども作れなかった時代がありました。地方に大学をたくさん作って、若者をそちらへ誘導しようとしたのだらうと思います。東京都の中でも八王子の方へ移転された大学もありました。これも確かなことですが、しかし、その大学が十分に地域に根ざしていなかったということは、組織としての大きな問題だったと私は思います。そのことがあまり目立たなかったのは、高度成長の時だったので、何か新しいものを作れば、何もしなくてもどんどん学生が集まって来る時代だったからです。今のように大学経営を深刻に考える必要はなかった。しかし、一度その規模を膨らませてしまうと、縮小することは難しい。いずれ現在のようないやしの時期が来る。この状況に入る前に、どうするかというこ

とも、あの当時いろいろと学内で議論しなくてはいけなかった。けれどご存知のように、当時学生運動が激しく、大学関係者は俺たちを管理しているのかと学生に抗議されましたし、今話題になっている産学協働という言葉を用いたら、すぐ襲撃を受けて命が危ない時代でした。明治大学は特にそういうことが強い大学でしたから、うっかり話せませんでした。そういう時代ですから、各大学は手をつけないで、とにかく現状のまま学生が来てくれれば、それでいいのではないかと考え、大学運営にあたっていたといっても過言ではないと思います。また先生方も、今までと同じことを教えていたらいいという感じでした。これが何十年も続くと、やはり組織的な疲労が出ることは間違いないですよ。そしてバブルが弾けて、平成3年頃からこのままでは駄目になるかもしれないと思いつつも、いずれV型で戻るからもう少し眠っていようかということで皆過ごしてきた。これは経済界は勿論、大学も同様だった。しかし、いくら経っても日本経済は横滑りのまま行ってしまい、そのうちだんだん右肩上がりどころか右肩が下がってくる感じに見えてきた。うっかりすると大学間の競争で、うちの大学が潰れるかもしれないという危機感から物事への取組みに変化が生じてきた。そのような動きが、バブルが弾けてから約20年。20年かけなければ物事が動かないという、この社会がそもそもおかしい。やはり、それまでの資産を食って、我々は過ごしてきたことは事実だと思います。そういうことの中で何か大学が欠けているものはないかということ考えた時、先生方が社会と離れているところで生活してきた、このことが体質的に問題ではないかと。私は学長に就任した時に、社会連携という言葉を使っていた。それはなぜかという、社会と連携して大学は何を求められているか、どういう研究・教育をしたらこの成果が社会に受け入れてもらえるか、ということを知ってもらいたい。このために、まずは個々の先生に自覚をしてもらいたい、社会がどうなっているか知ってもらいたい。これに随分時間が掛かりました。

その後、文科省の方で大学COC事業が始まりました。これは地域の中心になる大学が地域の企業や自治体などと関係する中で縦につながり、大学改革を行う事業です。横は、まだ大学間の競争があります。

(大学COC+事業の狙い)

それに対して、このCOC+（プラス）の方は、むしろその地域の横を繋いでいく中でどうあるべきかということ、これから考えてもらいたいという事業です。三重県で言えば、「三重大学だけが育てばいい。後は潰れてしまってもいい」という話ではない。三重大学が、三重県において中心になって、大学の在り方も産業もそして地域をどうするかということも考えていってもらいたい。横を見て引っ張っていってもらいたいという事業であります。また私は、ピラミッド型の産学官の地域活性と、他で発言してきましたが、これに関しては文科省が言っていることではなく、私の予測的なことです。その前に皆さんにお伝えしたいのですが、国立大学に対する文科省の取り扱いにつきまして、昨年12月、成果によって交付金の配分を考えることになりました。その時、3つのタイプを用意しました。一つはご存知のように人材育成や課題解決で地域に貢献する大学。二つ目は強みのある分野で全国的・世界的な研究・教育をする大学。これは例えば芸大という様なものと考えていただければ分かります。三つ目が世界で卓越した教育研究をする大学。具体的に言えば東大とかそういう大学を想定している。そうすると、この三重大学は、最初に挙げた「地域に貢献する大学」と

して方針を考えるわけでしょうか。駒田学長とのヒアリングで「なるほど」と思ったのですが、学則を変えて目的に「地域に貢献する」という趣旨を加えて謳ったのは、国立大学で三重大が初めてです。学則のところで大学の目的を変えるなんてことは、なかなかできないことであり、本当に大変なことです。これは大学を預かってみるとわかることです。もっとはっきり言えば、私としても三重大を本事業のモデルにしていかに得ないと思いました。これについては、国の政策に乗ることが良いかどうかという点で意見はあります。でも、地域と繋がらない国立大学の複数存在は必要ありません。地域に根差していても、やはり研究教育は世界的な視点を持たなければなりません。でも今回の事業は、地域における他大学、企業、自治体などと連携して、教育の場で、人材養成をしていただく事業です。そういう意味では、「全ての道はローマに通じている」ではないですけど、全ては世界の頂点を目指して展開していかなければいけないことは確かです。今はグローバル化の時代ですから。しかし「地域に根差す」という原点を忘れてしまうと、その大学の持っている存在意義はなくなるわけですから、そこは、それで大事にしなくてははいけません。大学がもし失敗すると地域はどういうことになるかという例を挙げます。私は北海道出身ですが、北海道の一番北の端の方にある稚内で、大学が無くなったことがありました。そうすると町の活気がどんどん減っていきました。若者が集まる地域というのは、活力が出てくる、将来に対する夢がある、そうすると先生方もそのために研究し教育し育ててはいけないという風に進んでいく。そういうことを我々はきちんと理解しておく必要があるのではないかと考えております。とは言っても、バブル時期に数多くの大学ができたものですから、どこかで取捨選択あるいは集約しなければいけないところが社会的事情としてはある。今は「大学間の競争」などと格好良く言っていますが、将来モデルができた時に、どこかの地域で、特定の大学が中心になって一つのまとまりを持った教育研究の組織体になる。大学COC+というのは、将来そこへ繋がる可能性が十分ある。それは、中心拠点大学になればなるほど大変な役割を担うことになる。その点で三重大のこれからについて、すごく興味を持っております。

（「地方創生」政策との関係）

地方創生の問題について。地域活性化ということを考えてください。先ほど就職率10%アップと言われていました。大学がどれだけ頑張っているかというところで、地域活性化の成果を測ることは非常に難しい。地方で活性化したことが現れてくる一つの目安として、就職率があります。これを見ると、正しく数字は語る。それで10%上げてくださいと政策的な数値目標を掲げている。しかし、これはone of themです。この10%まであげるために地方活性化をしなければならぬ。そのために地域の課題を解決したり、新産業で、この地域が成り立つか成り立たないか、この社会の人たちが十分満足するかしないかということをしちつと詰める必要があります。詰めておかないと、この活性化というのはできないわけです。それを企業ひとつひとつに任せるのではなくて、大学の地（知）を利用しながら行って、将来性に繋げていただきたい。そのために、やはり長い目で見ると、大学が引っ張らないといけません。人を育てるといふこと、ここをしっかりとしておかないと、日本の社会全体で人材の養成を間違えてしまうことになりかねないので、頑張ってください。

全学的な教学マネジメント

大学が組織として、教育研究の質を変えていく。そのための1つの手段として本事業、大学COC+事業があるのだということをしかりと理解していただきたい。そのためにはやはり、学長が引っ張らないと無理なのですね。学部長レベルではどうにもなりません。やはり新しいものをつくる時には、誰かが中心になって引っ張らなければ、どうにもならない。そういう時代に入ったということです。それから今、計画は立てたけれど実行はどうかということ、PDCAという経営学の概念を用いて確認し続けなければならない。私はプランを作っても、中身がなければあまり意味がないと思います。中身のない袋はすぐ倒れてしまう。やはり中身があって、その事業という入れ物できちんと立っていくことができます。そして、それをいつもチェックしていかない限り、大学の運営はできないわけです。そのためには自己点検をして予算をどこにつけるかということもしかりしておかなくてはいけない。その予算とこの自己点検をつなぐためには、先ほど言ったAというところ、要するに将来計画を策定し、それに基づいて、この大学をどのようにもっていくかということ、そこを長期的に決めておかないといけない。ここが非常に重要なことで、これをしかりしておかないと、PもCもあまり意味がないということになってしまう。これは大学の学長および（または）理事長、そういう大学運営の中心になるスタッフが考えておかなければいけない。それも単年度ではなく、長期的に考えなければならないと思います。

結び

三重大学の場合には、学則を変えて、大学の目的につき地域との繋がりを謳った訳です。駒田学長がヒアリングで、「私は学長になって地域の企業などあちこち回った、市町村にも訪問して、いろいろと話を聞いてきました。ですから責任を持ってやります。」と言った。そこで私は、「それはいいけれども、言葉だけでは駄目で、実施する組織をきちんと整備してほしい。」と言いました。副学長やコーディネーターに任せきりでは、大学の改革に繋がらないからです。期待するが故に言いました。三重大学は以前のCOCの申請時には地域との繋がりが全く感じられなかった。全くと言うと語弊があるけど、それが薄く感じた。それで、採択しないということになりました。少しくつめに言うと、今回の申請にかかる事業計画調書に添付された実施体制図では、三重大学だけやれば参加大学はどうでもいいかのように見えてしまうところがある。参加大学が集まって、彼らにもそれなりの責任があるということを知ってもらうための協議体が必要なのです。三重大学も入って、具体的に地域のためにどういう横の繋がりを築くかです。これを行う組織が少し弱いのではないかと思う。企業や自治体との繋がりもあると思うのですが、任せっぱなしにしてしまうとやはりうまくいかないの、常にそこを教学の方へどうつないでいくかを議論していただきたい。それを三重大学が引っ張っていただくことが必要だと思っております。駒田学長には申し訳ありませんけれど、学長としてのリーダーシップで、モデルを作るつもりで頑張っていたいただきたいと思っております。そのような形でエールを送りながら、私の講演を終わらせていただきたいと思います。ぜひ、地方大学のモデルになっていただきたいと期待しております。以上でございます。

パネルディスカッション



「三重県における地方創生を考える

～これからの三重県が必要とする人材とは～

雲井／皆さん、こんにちは。ファシリテーターを務めさせていただきます、三重大学地域創発センター所属の地域活性化推進コーディネーターの雲井でございます。本日はこのパネルディスカッションにご登壇いただくために、多用中にもかかわらず、お越しいただきまして誠にありがとうございます。COC+事業につきましては先ほど山本教育担当理事と公益財団法人・大学基準協会特別顧問の納谷先生の方から詳しい説明がありましたので、皆さんご理解いただけたかと思えます。これを受けて、このパネルディスカッションでは「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」という、人材に重点を置いたテーマでご討議いただきたいと思います。パネリストの皆様には最初に自己紹介をしていただいた後、一つ目の論点として①三重県における地域の問題・課題は何か、②地域活性化をしていく上でのエンジンとしてはどのような人材が必要とされているのか、についてそれぞれのお立場からご意見をいただきたいと思います。そして二つ目の論点として、地域人材・地域イノベーションの推進に向けて大学をはじめとする高等教育機関にどのような役割・機能が期待されるのか、についてご意見をいただきたいと思います。ご発言の順番は、三重大学の卒業生で、県内企業でご活躍のお二人。次に、県内企業に就職が内定している4年生の現役学生のお二人、地元企業経営者のお二方、小山南伊勢町長と末松鈴鹿市長の順でお願い致します。そして最後に、納谷先生にご発言いただきたいと思います。それでは最初に山本豊さんをお願いしたいと思います。山本さんは、おにぎりせんべいで有名なマस्याグループ本社で商品開発担当されています。



地域活性化推進コーディネーター

雲井 純

山本氏／はい。ただいまご紹介いただきました、伊勢にあります株式会社マस्याの山本と申します。私は三重大学出身で、2001年に生物資源学部に入學後、修士課程、博士課程を経て2010年に弊社、株式会社マस्याに入社いたしました。現在、商品開発をメインに業務をさせていただいております。先ほどお話にありました三重県の産業の問題点について私の思うところですが、一つはやはり大都市から遠いということ、特に三重県南部は地理的にも離れているということ、いわゆる国土軸というところから離れているということが考えられま



株式会社マस्याグループ本社

山本 豊 氏

す。また先ほど知事のお話にもあったように、やはり人材の流出が激しいということです。あとは北部のほうは名古屋圏に近いということで、いろんな企業の工場や働く場所が多いかと思いますが、南部にいくとそういったところが少ない、南北差があると思います。大都市と比べると得られる情報が少ないことも実感しています。次に地域活性化のエンジンとなる人材について、多くある中小企業の中で働くには、いろんな能力が求められると思っています。大企業ならば一つの歯車として働くことも可能だとは思いますが、中小企業では学力はもちろん、コミュニケーション力、与えられる業務に対応する様々な能力が必要だと思います。自分には向いていないとか、そういった考えを持たないような、いろんなことに取り組んでいけるという考え方を持ったチャレンジングな人材が必要なのかなと私は思っています。以上です。

雲井／はい、ありがとうございました。山本さんは三重大学に入学されましたが、ご出身は確か和歌山でしたよね？

山本氏／はい、和歌山県です。

雲井／ありがとうございます。それでは続きまして、四日市の伊藤工機株式会社さんの工場の中にある NIT 株式会社にお勤めで、ナノアイスについて研究されている田口さん、お願いします。

田口氏／ただいまご紹介にあずかりました田口と申します。私は高校を卒業するまでの 18 年間、愛知県で生まれ育ち、純粋に三重県が地元とは言えないかもしれませんが、学位を取得するまでのおよそ 10 年間にわたって三重県の津市に住んでいましたので、三重県は第二の故郷といえますか、地元だと感じております。それで、本日このような場が上がっているのかなとっております。私は運よく学位を取得することができた後、8 年ほど博士研究員や特任教員として、いわゆるポスドクという立場で県外へ出ていました。恐らく皆さんもご存じかと思いますが、ポスドクとは期限が決まっている雇用形態のことです。私自身の家の関係ですけれども、長男ということもあって将来的には親の面倒を見る必要も出てくるだろうということで、幼い頃から地元、できれば東海圏には戻ってきたいなという漠然とした思いを、ずっと持ったまま県外に出て働いておりました。そんなときに三重大学でインターンシップ推進事業として採択されていた「イノベータ養成のためのサンドイッチ教育」という募集を見つけまして、これに応募しました。2012 年 5 月のことですので、4 年ほど前に三重県に戻ってまいりました。この事業はインターンシップが特徴的でしたが、そのときにお会いしたのが現在勤めている NIT 株式会社の伊藤社長でした。それまで、専門的に狭いところを追い詰めてやってきたこと・分野とは異なる分野の企業でしたので、不安



NIT 株式会社

田口 秀典 氏

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

がありましたが、インターンシップの期間中、弊社で開発していた機械の開発経緯であるとか、社長の信念をお聞きして心がひかれたといいますか、私もやってみたいなという思いが募りまして、インターン終了後も引き続き雇い入れていただけないかとお話しし現在に至っております。私の場合は運良く、三重県の企業にインターンシップという形で直接魅力を感じられる環境に遭遇できましたが、今後は今回の COC+の事業を通じて県内企業の魅力が伝えられるような場がもっと増えてくれば、人材の流出が抑えられるのではないかなと考えております。以上です。

雲井／はい、ありがとうございました。お二方とも県外のご出身で、三重県企業と出会い、そこに就職された方です。続きまして、今度は学生の方です。生物資源学部4年の井上瞬さんをお願いしたいと思います。JA 全農みえに内定されていると伺っています。

井上／ただいまご紹介にあずかりました三重大学生物資源学部からまいりました井上瞬と申します。本日はよろしくお願いたします。私は四日市市出身です。今回、全国農業協同組合連合会三重県本部から内定をいただきました。地元である三重県に就職を希望した理由といたしましては、大学3年の夏にインターンシップに参加させていただいたことがきっかけでした。そこでさまざまな農業の現場を見学させていただき、農家さんの声を聞き現状と課題を知りました。そのとき三重県の農業をもっと活性化させたいと思い、就職を希望いたしました。また私の考える地域活性化のエンジンとして求められる人材は、三重県の課題を理解している人であると考えています。先ほどもお話しさせていただきましたが、私はインターンシップを経て三重県の農業に興味を持ち、三重県の課題を知りました。そうした課題を知ることで目標を持ち、高いモチベーションで働くことができるのではないかと考えております。以上です。



三重大学 生物資源学部4年
井上 瞬

雲井／ありがとうございます。それでは人文学部4年生の山下さん、お願いします。株式会社百五銀行に内定していると伺っております。それではよろしくお願いたします。

山下／ただいまご紹介にあずかりました人文学部法律経済学科4年の山下莉奈と申します。株式会社百五銀行の内定者ということで本日、参加させていただいております。本日は学生目線の意見を発信できればと考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。まず三重県における地域産業の問題といたしましては、産業構造の違いによる県内での経済格差が挙げられるのではないかと考えております。北部では中京圏や近畿圏と近距離であることから、製造業関連の事業所が集積しているので、地域活性化に大きな役割を果たしていると言えます。また南部では豊かな自然や歴史、文化などの資源を有しているために観光業が重

要な役割を占めております。しかしながら道路や鉄道といった交通網の基盤が弱いことから、南部地域の観光業を取り巻く環境は厳しいものとなっております。また南部地域の主力産業である農林水産業、これに関しましても高齢化の影響によって衰退しております。こういった産業構造とそれを取り巻く環境の違いによって、南部と北部で経済格差が生じていることが問題だと考えております。そのため課題といたしましては、南部地域での交通網の整備を進めていくことに加えて、農林水産業に後継者を呼び込むための支援策を実施していくことが必要なのではないかと考えました。また 2 点目の地域活性化に必要な人材としましては、後継者に必要な資質を備えた人材や地域内企業の情報に精通した人材が必要なのではないかと考えております。現在、少子高齢化に加えて若者が就職を機に県外へ流出しております。それによって後継者は不足しており、廃業などが増加することで地域衰退が進展していると考えております。そのために後継者に必要となるリーダーシップや企業経営力などを兼ね備えた人材が地域活性化に必要であると考えております。また、地域活性化には域内企業同士の連携が必要であると考えているので、域内企業の情報に精通した人材も必要となってくるのではないかと考えております。以上です。



三重大学 人文学部 4 年

山下 莉奈

雲井／はい、ありがとうございました。たいへん良く地域の課題について勉強しておられますね。頑張ってください。それでは続きまして、万協製薬の松浦社長にお願いしたいと思います。ご承知の方も多い有名人ですけれども、兵庫県から多気町に移って来られ、百数十人の新規雇用を生み出した方です。それから三重大学大学院地域イノベーション学研究所発足の時、その立ち上げにもご尽力いただいた方です。それではよろしくお願ひします。

松浦氏／ご紹介いただきました万協製薬社長の松浦でございます。まずは COC+採択おめでとうございます。また今日こちらへ来ていただきました皆さん、本当にありがとうございます。私にとっては本当にやっと今日、この日が来たなど。もううれしくて仕方がないわけでございます。本日、前々学長の豊田先生がいらっしゃいますけれども、ちょうど 2000 年あたりから三重県はメディカルバレー構想というふうなことで、地域企業と産官学の連携活動をずっとやってまいりました。それから地域イノベーション学研究所ができて、今回駒田先生が学長になられて、そこを変えられて地域貢献というところを前に出されたということは、本当に意味のあることだと思っています。ご記憶は皆さんもあるかと思いますが、私は 21 年前の阪神・淡路大震災で被災いたしまして、それから 20 年前にこちらへ立地いたしました。私の工場があるのは三重県の南部でござ



万協製薬株式会社

代表取締役社長 松浦 信男 氏

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

いますので、温暖な気候の中で都市部の人たちとは随分違うそれぞれの土地・地域の特質がある中で、そこを一緒にしていくということ、地域に溶け込むということも、随分難しい時代でもあったわけでございます。私にちょっとお誘いがありまして、まだ地域イノベーション学研究科ができる前に 2009 年から三重大学の医学部の博士課程に入らせていただいて、いわゆる会社経営者として大学の中でいろんな勉学をさせていただきました。大学の中に入ったことによって、いわゆる地位とか歴史とか、そういうのを抜けてさまざまなゼミナールでディスカッションできたことが現在の私を育ててくれたと思っています。そういった中で共通のキーワードでみんなとよく話していたのは、地域貢献ということだったわけでございます。こういった形で三重大学が中心となって、地域貢献のためのさまざまな取り組みを今後していただくということは非常に期待できるものだと思いますし、何せ三重県は南北、東西に長いので、その地域を一番知っているのは地域の企業ですし、やはり経営者の皆さんやその社員の皆さんの協力なくして三重大の今回の地（知）の拠点事業の成果は出てこないと思います。私の会社は多少有名にもなったということで毎年、三重大の学生の皆さんに来ていただいて、いろんな場所で活躍いただいております。こういった形で大学が地域のためにいくという命題を出されたということ、私は非常に評価するとともに、ぜひここにいらっしゃる皆さんでこれをどんどん発信していきたいと思っていますので、まずはそういった意味でこれからの三重大学を中心とした COC+の活動に期待をしています。ぜひ頑張ってください。以上です。

雲井／はい、松浦社長、ありがとうございました。では続きまして、工作機械メーカーといえますと、女性の職場というイメージとは少しかけ離れているのですが、その社長をされながら女性の活躍に熱心に取り組んでおられる西岡社長、よろしく願いいたします。

西岡氏／皆さん、こんにちは。光機械製作所の西岡でございます。今日はこのような席にお招きをいただきましてありがとうございます。そして非常に意義のある COC+のこの事業にも企業として参画をさせていただくことができていること、またこれも感謝を申し上げたいと思います。弊社は先ほどもご紹介いただきましたように、工作機械のメーカーでございます。工作機械というのはまだ日本の製品としては国際競争力があるといわれている製品でございます、私たちの製品も半数以上が海外に出ていっています。ですから、海外を視野に入れた人材を育成していただくという



株式会社光機械製作所

代表取締役社長 西岡 慶子 氏

ことにおいては、大学あるいは本日の参加校の皆様方に大きな期待を寄せるところでございます。最近、非常に心に残る言葉のある方から伺いました。その方はイタリアに研修に行かれたそうですけれども、イタリアも中小企業がたくさんあって、中小企業というよりはファミリー企業といったほうがいいのかもかもしれませんけれども、そこに行って「国敗れて地方あり」と、そういう言葉を聞いてこられたということです。これは今の日本の状況も示してい

る言葉だなというふうに感じました。三重県はいろんなものに恵まれている県ですけれども、先ほどもお話があったように南北に長いとか、特に若い世代の県外への流出が問題であるとか、そういう課題はありますけれども、私が企業を経営していることから考えてみると、一つにはやっぱりイノベーションを創出していくような力にやや欠けるのではないかと、それとその会社の状況、あるいは製品などを発信する力に欠けているのではないかとというようなことを感じます。もう一つは、人というのは自分の好きなことにすごく情熱を燃やしますし、そこにはエネルギーをどれだけかけても疲れを知りません。そういう意味ではやはり自分の好きなことを大学卒業までに見つけて、そういったところに関わりのある会社に就職ができるということが、非常に先ほどから課題になっていることを解決する一つではないのかなというふうに感じます。私どもでも三重大学さんと、鈴鹿高専さんの卒業生の方たちが技術、あるいは開発部門の70%を占めていますので、先ほど申し上げた期待というのが大きいうこともわかっていただけるかなと思います。

雲井／はい、ありがとうございました。それでは南伊勢町という大変風光明媚なところからっしやいますが、人口流出と過疎にお悩みの小山町長、お願いいたします。

小山氏／皆さん、こんにちは。南伊勢町長の小山巧と申します。私は長い間三重県庁に勤めさせていただいて、そして定年の少し前に退職しまして、現在、南伊勢町長をさせていただいております。南伊勢町というのは県内29市町の中で人口減少、そして若者流出、高齢化率がうれしくないトップということで、これからの日本というか、人口減少が進む過疎地域の先端をいっているような地域だと思います。そういう意味ではいろんな課題、問題があるというふうに考えています。今日いただいたテーマが「地域の産業の問題と課題」ということで、私は県南部の南伊勢町の町長という立場から課題等を提



南伊勢町

町長 小山 巧 氏

起させていただきたいと思います。まず問題として1次産業はもちろん長く低迷しているのですが、これが若者にとって魅力のない産業となっていて、後継者がいなくなっている、労働力不足になっているわけです。これは現役世代が高齢化しており、そして生産力が落ちていきますけれども、現役世代そのものも、もう自分たちの仕事に魅力がないとっていて、自分の子どももそうだし、地域の子どもたちに地域の魅力を話していないということが地域にとって大きな問題になってきているかなと思います。そういう中で、1次産業について見ますと、やはり1次産業を取り巻く社会の仕組み、制度、そして事業者の認識、地域の認識もまだまだ高度成長期のままになっているのではないかなというふうな印象を受けます。そして課題として考えるのは、2次産業・3次産業は、時代の変化に応じて生き残りをかけてかなり努力を重ねてきていて、その結果、今があるわけですけれども、1次産業はそういう努力に乏しかったのだろうというふうに私は思います。1次産業というのは地域の中であって、地域で生じる資源をそのまま生かす産業で、本当はどの地域でもオンリーワンになれる可能性

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

があるのですが、そういうことがやられてないということは、創意工夫というか、努力がなかったというふうに思います。実際に創意工夫をしている事業者は、その中の小さい零細的な事業者ですけれども、かなり成功してきている例が見られます。ですから、漁業、農業の全部がだめではなくて、努力している人は報われている、かなり成果も上がっています。そういう意味では付加価値をつける、6次化ということですが、そういう方向があるのではないかと思います。そしてまた、高度成長期の頃から社会的インフラ、これはハードもそうですが、ソフトのインフラがかなり整ってきていますからこれらをうまく活用していけば、1次産業まだまだ捨てたものではないというのがこれからの課題だと思います。そういう意味では課題というのは、地域でこれからの時代における1次産業の体制を、人材育成も含めて構築していくことだと思います。人材として、南伊勢にこんな人がいてほしいというのは、チャレンジできる人とか、あきらめない人、そして創意工夫できる人、関係性を作れる人、そして起業家精神はもちろんですけれども、専門的な知識を有する人というのももちろん欲しいと思います。それをまとめると、想像力を持ち実行力を発揮できる人材とか、地域でプロデュース力を発揮できる人材、そしてもう一つは人的ネットワークとか、人の関係性を構築して地域経営ができる人。そういう人たちが南伊勢に来てほしいというふうに考えています。

雲井／ありがとうございました。それでは三重県の経済を引っ張っている北勢地区の代表として、これからも働く場をどんどん作っていただかなければいけない、鈴鹿市の末松市長、お願いします。

末松氏／皆様、こんにちは。鈴鹿市長の末松則子でございます。今日はCOC+のキックオフのシンポジウムにお招きをいただきまして、ありがとうございます。鈴鹿市にあります高等教育機関の皆様方がすべてこのCOC+に参加をさせていただいておりますので、そういった関係で今日は呼んでいただいたと思っております。先ほどお話しいただいた北勢地域、しっかりと製造品出荷額も上げておりますし、経済を引っ張っているという自負はあります。本市、鈴鹿市も県内で第2位の製造品出荷額を有しております、1兆5000億



鈴鹿市

市長 末松 則子 氏

を超えるぐらい今頑張っているところでありますけれども、一方では、少しずつではありますが社会減は例外なく訪れているという状況であります。人口20万人でありますけれども、もう少しすると少しずつ微減というようになってまいります。ただ私どもの市内におきましても、地域によりましてはまだ子どもが増えていくという学校もありますので、そういったことも含めまして、どういうふうに地域内のバランスを取っていくかというのがこれからの課題であると思っております。三重県全体のお話で、先ほど山下さんにお話をいただきましたとおり、三重県は公共交通、特に鉄道が弱い部分があるのかなと思います。鈴鹿市につきましては近鉄がしっかり走っていただいている

のですが、やはり JR と近鉄の路線がないところだと、都会から工場の方々が立地をするということで見に来ていただきましても、労働者をどういうふうにその工場まで持っていくかということも含め、公共交通の整備というものがこれから非常に大事になってくる。どうしても駅に近いところのほうが立地をしやすくなりますので、そういう意味でもこれからの公共交通というものをしっかり構築し、ネットワーク化をしていっていただきたいなと思っておりますし、していく必要があると最近痛感しております。以前知事とも伺いましたが、先日も北勢バイパスという道路の要望活動に国交省に行ってまいりました。新名神という大きな高速道路、大動脈がもうすぐ平成 30 年度には三重県区間が全線開通をする予定であります。そういった道路と県南部の道路、三重県の北と南をしっかりとつなぐことによってこの地域が活性化する、道路が街を作るといふところもあろうかと思っておりますので、そういった道路網を早期に作り上げていかなければならないと思っております。そのネットワークが繋がらないと、四日市港からの輸送もなかなか大きく成長しないというようなところも思っております。北勢地域はものづくりの街であり、輸送というものが大事になってきますので、物流コストのことを考えると、こういうところがこれからの課題かなと思っております。都市計画法の中でも線引きの話もあります。そういうようなこともしっかりと考えられる人材をぜひいただきたいなというふうに思いますし、行政は大変地味な仕事をしていますので、住民の悩み事にもしっかりとこたえられる、耳を傾けていただけるようなバイタリティのある、そしてできれば鈴鹿市が好き、三重県が大好きというような人材に 1 人でも多く残っていただけるようなまちづくりをこれからしていきたいなというふうに思っておりますので、よろしくお願い致します。

雲井／はい、ありがとうございます。いろいろなお立場から課題が出てまいりました。納谷先生に、そのあたりを踏まえてコメントいただければと思います。

納谷氏／大変恐縮ですが、今の話を聞いて率直なことを申し上げたいと思います。私は北海道生まれですので、あまり関西のほうを知らないのですが、たとえば交通の点。どの線を使えばうまくいくかということについて、この津に来ることさえも少し気になるぐらいですので、南のほうへ行くともっと大変だろうと思います。やはりその整備というのは課題だろうと思います。しかし裏返していうと、それぞれの地域に何らかの特色があって、それを頑固に守っている。このところが、ある意味じゃ力になっているのかもしれない。その使い方次第だと思います。交通網はきちんとしていただかなければならないのですが、多様性ということも必要なので、そういう意味では三重県は恵まれている。北のほうと南のほうで、それぞれ役割を持って、それをつないでいるわけですから。それをうまく結びつける行政だとか、大学人の知が必要なのではないかなと私は思っております。もう一つは、チャレンジといいますか、夢を持ったらず必ず実現するというふうにやり続けなければいけないと、私は思っ



公益財団法人 大学基準協会
特別顧問 納谷 廣美 氏

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

います。伝統を守るとか、いろんなことがあるのですが、時代に合わせて伝統を守るためには、いつも刷新していくといいますが、イノベーションしていかなければならない。伝統がある時期きちんと変えていく力、知恵というものがこの三重県で注目されている。それを実現していただいたら、日本の一つの特色ある地域が生まれてくるのかなと思っています。

雲井／ありがとうございました。いろいろお話がありましたけれども、地域を元気にする人材に要求される資質として、人と人をつなぐことが出来る、創意工夫、チャレンジ精神、と言ったキーワードが示されましたが、そういう人を作っていくのはなかなか大変なことです。県外へ転出していく人の数も考えれば、1人でも多くそのような人たちを育てていかなければいけないと思います。そういう人材を作るためにも、これからどのようなことを教育機関に期待をしていくべきなのか、あるいはそういう人材を育てるために自分の立場でどういう協力ができるのだろうかとか、こういった切り口でお話をいただければと思います。また順番は先ほどと同様に山本さんのほうから、お願いいたします。

山本氏／高等教育機関に求める教育ということですがけれども、最近は教育において何で評価するかというと、数字をもって評価するというのが最もやりやすいと思います。例えば高校ですと、〇〇大学に何人入ったとか、大学だったらどの企業に何人入ったとか、そういう数字というのは結構重要なファクターになってくるのかなと思います。そこはそこで、大切なかもしれないのですが、よい社会人というのを育成するというのは、数字で見えないところにあり、そういったことが大切になってくるのかなと思っています。そのよい社会人とは何かということですがけれども、一つ目は自分できっちりお金を稼げるというところ。お金を稼ぐにはその業務を遂行できる、新しい事業を創造できるというところが必要なのですが、それには基礎的な学力はもちろんですし、応用的な能力というものも必要になってくるのかなと思います。そういういろんな能力を含めて自分でお金を稼げること、それが必要なと思います。二つ目としては社会的に正しい考え方ができること、つまり倫理観を持つということだと思います。社会通念的に正しいことを自分で考えて、そういった行動ができるという、そういう倫理観のところですか。三つ目として先ほどもいろんなコメンテーターの方がおっしゃいましたが、人脈を作る、人の信頼を得ることが働く上で最も大切なことだと思います。人々の信頼とか、人脈を作る上で何が必要かなということですがけれども、魅力的な人間性というのが必要になってくるのかなと思います。私も見いだせていないところではありますが、魅力的な人間になるには、いろんな考え方とか、思いやりとか、そういった総合的な人間力というところを鍛えていくことが必要になるのかなと思います。以上です。

雲井／はい、ありがとうございました。では続いて、田口さん、お願いいたします。

田口氏／私が高等教育機関に今後求めたいことというのは、私は学部から進学してドクターコースまでいったのですが、どちらかというともう本当に狭いところばかり突き詰めてくというような教育といいますが、狭いところももちろん突き詰めていかなきゃいけないのはわ

かるのですが、もう少し幅の広い、深くないけど広い視点というか、そういった教育が受けられるような環境があるといいかなというふうに考えています。今で言うと、三重大学では地域イノベーション学研究科ができて、そこでは専門的プラスほかの分野のことも勉強できるようなカリキュラムになっているようですが、そういった試みというのはすごく魅力的だなと感じていて、私が在学中はそういった研究科がなかったので、今後も発展していったらいいなというふうに考えています。あともう一つ、人間性のこともあるのですが、ディベート的なことがうまくできるような講義であるとか、そういった環境を作ってもらいたいなと思います。後輩には発言しやすいとは思いますが、先輩に対しても何でも意見が言えるような、そういった大学、学校だけではないですけど、企業内でもそういった環境ができてくるといいのではないかなというふうに思っています。

雲井／ありがとうございます。いろいろオープンにディスカッションできるような、そういう場の設定ということですね。ありがとうございました。それでは、井上さん、お願いします。

井上／私の考える高等教育機関の役割とは地元を知るための時間を増やすことであると考えています。そういった時間を増やすことにより、三重県の産業の課題を知り、地元に興味を持つ人が増えるのではないかと考えています。私の経験ですが、小学校のときは田植え、ミカン狩り、社会見学など地元の産業にふれる機会が多くありました。しかし大学ではどうかといいますと、あまりそういった機会が少ないというのが一つあり、就職する前の体験をもって三重県の産業の課題、現状を知ることが大切ではないのかと思っております。また企業側に求めることといたしまして、地元のよさ、やりがいを伝えることが重要になってくるのではないかと考えています。そのやりがいを伝えるために、お話にも出てきましたがインターンシップの強化、例えば参加人数を増やす、さまざまな体験をする、現場への参加を増やすなどのことを強化していただきたいと思っております。私はインターンシップで、職員の方が農家の方とともに農業をよくしていこうとする思いを強く感じました。そこに地元のよさ、やりがいを感じました。ですので、そういった機会を提供することも大切であると考えています。

雲井／はい、ありがとうございました。井上さんは、実際にインターンシップを経験されたのですか。

井上／はい、大学3年生のときの夏に、三重大学がインターンシップの一覧表を就職支援センターから出していましたので、そこで希望いたしました。

雲井／具体的には農業でしょうか。

井上／はい、全農に応募しました。

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

雲井／全農さんに行って仕事を体験したことで、そこを就職先にしようと思ったのですか。

井上／はい、そうです。学校では林業を専攻しているのですが、そこにちょっと通ずる農業というので参加させていただきました。

雲井／インターンシップが有効に活用された事例ですね。ありがとうございました。それでは山下さん、お願いします。

山下／では人材育成の観点から高等教育機関に期待する役割を述べたいと思います。後継者に必要な資質を備えた人材や、地域内企業の情報に精通した人材といった地域活性化のエンジンとして必要とされる人材を育成することが、高等教育機関に期待されると考えております。そのためには講義だけではなくて、先ほども話に出ていたように実践形式の授業を実施することでリーダーシップなどの後継者に必要な資質というのが育てられるのではないかと考えております。また COC+事業にもあるように地域について学び、考えることができるような授業の取り入れがさらに期待されます。そうすることで三重県の全体像を把握したうえで各企業に精通した人材が育成できると考えたためです。また現在、進学のために三重県から流出した学生がそのまま都市部で就職する傾向があります。そのため学生が県内の高等教育機関に進学することは若者の流出を食い止めるために重要な課題であると考えています。県内の高等教育機関に進学する学生を増加させるためには、各教育機関独自の授業内容や研究内容というのを学生に幅広く認識してもらって、興味を持ってもらうことが非常に重要であると考えております。そのために地域内企業と大学との連携を取ったりすることで、学生もより興味を持つのではないかと考えております。また県内企業に就職する人材においても、やはり地域について学ぶことが重要だと考えております。私が県内に就職した理由というのは家族の希望もありましたが、今まで育ってきたふるさとで社会人になれるということで安心して社会に出ていけることや生まれたときから関わってきた地域に貢献できることも大きな理由でした。高等教育機関で地域について学ぶことというのは地域への興味が広がるほかにも、地域に対する安心感へとつながっていくと考えております。そのため私のように社会人になることに不安を抱いている学生は、地域について学ぶことで地域に対する興味と安心感が増し、結果、県内企業に就職する学生が増えるのではないかと考えております。以上です。

雲井／はい、ありがとうございました。山下さんは学生時代、部活に一生懸命になっていたから、あまりインターンシップに行く時間が無かったのではありませんか。

山下／そうですね。行きたかったという思いもあったのですが、部活動の都合でインターンシップには参加することはできませんでした。

雲井／それだけにこういうのがあったらいいなと、そういう発言ですね。それでは続きまして松浦社長、お願いします。

松浦氏／私はそもそも知恵や知識というのは空間を超える力があるのではないかというふうに思っています。今ずっと皆さんの中では、この三重県が地理的に恵まれてないというふうな話がありましたけれども、そもそもそんなことは言っても仕方ないことだと思うのです。例えば弊社万協製薬は、三重県南部の過疎が進む 1 万 5000 人のところにありますが、うちの会社は三重県に立地して 70 倍の成長をしています。医薬品製造業という、恐らく最も知的集産・集約力がなければやっていけないところなんです。私はここに、全国から人がもう来なくなるようなさまざまな仕組みを持って、三重県多気町に引っ越してきてもらっています。ですから、そもそもこういう COC+ でやっていくとすれば、高等教育機関が教育の力をもっと牽連し、示し、来なくなるような教育を提供することが、やはり一番大事だと思っています。私は三重県南部のさまざまな高校の評議員をしています。例えばもう十分三重大学に進学できるような学力を持った女子学生が、親から「女の子だから、この子は勉強なんかしないでいいんだ」ということで進学を断念しているような例を知っています。そもそも親御さんであれば子どもの将来は考えているわけですが、それが学問とつながっていない現状というのをやはり見ていくべきだと思います。そういったことを教育の中で変えるべきだと思います。これはもちろん三重県だけの例ではないですけれども、一生懸命勉強して、いい大学に入って、いい会社へ入る。これはそもそも個人が個人の幸せを追求するためにやっていることだと思います。僕は高校生や中学生の子たちにこう言っています。そんなことを考えるのは小さいと。これから日本は大変な時代になるのだから、日本を救う人になるために勉強すべきではないのかというふうに言っています。例えば三重大学は地域貢献をメインで考えていくのであれば、地域貢献というのは自分以外の他者の幸せを考える力ではないでしょうか。そういった力を考えるときに、やはり大学、高等教育機関がそういったアプローチに沿った教育や実践を提供できなかつたら、本当のファンタジスタの創生じゃなく単なるファンタジーに終わってしまうと思います。だから私たちは本当に真剣に生きて、毎日人を雇い、利益を出し、納税して一生懸命生きています。そういう私たちのリアルな言葉を聞き、そういった私たちが考える地域創生と一緒に大学と考えていただければ、本当の意味のファンタジスタは作れると思いますし、そもそも高等教育は知恵と学問両方合わせてリベラルアーツを育てるものだと思います。そういったものは本当に空間を超える力があるので、私は地理的不利を超えて、大学、高等機関がどんどん魅力を出していけば、学生は必ず三重県にやってきます。以上です。

雲井／ありがとうございます。「何もない」、「人が来ない」と嘆いてばかりいるのではなくて、それを吸引する力を持つと。さすが松浦社長らしいご発言でした。では次、西岡慶子社長、お願いいたします。

西岡氏／私も先ほど申し上げたように今、私たちのビジネスというのは完全に海を超えています。そのような中でやはりとんがった技術であるとか、とんがった特徴というのがすごく求められる時代です。これは企業にとってもそうですし、大学にとっても、そして個人にとってもそうであるはずなんです。ですから大学は、先ほど松浦さんも言われましたけれども、やはりとんがった人材を育てていく、そしてそういった人材を受けて、企業もまたさらにとん

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

がっていく、そういうことができるような企業と大学の関係というのが大事ではないのかなと思います。それともう一つは、人というのは何かを好きになるためには知るということがとっても大事です。知らなければ好きにはなれません。これは人を好きになるときも一緒ですよ。知らない人を好きになることは絶対ありません。ですから県内の産業もそうですけれども、どんな企業があるのかということを経営者のCOC+の事業を通じて、形式的なことではなく、県内の企業はこんなにとんがったところがあるとか、こんなに面白い企業があるということを知っていただきたいですし、大学も一緒にやっていただければというふうに思います。それとリベラルアーツの話もありましたけれども、最近私どもの若い世代の社員と話していてドキッとすることがあります。それは歴史を知らないということです。もちろん日本史というと2000年というようなスパンではありますけれども、そんなことではなくて特にこの100年、200年の歴史を知らない。そういった歴史も知らない人たちがいろいろな国の人たちと今ビジネスをしている。こういうことを知らないと不用意な発言をしてしまいます。ですからこれは大学だけの問題ではないと思いますが、教育としてそういったこともきちんとやっていかないと。今グローバル人材ということで随分声高にいられていますけれども、その一つとして私はここ100年、200年の歴史をきちっと教えていくということも大事なことはないかなというふうに思います。もちろんいろんなことが大事なのですが、特に私がさっき申し上げた3点については最近よく心にすることでございます。以上です。

雲井／はい、ありがとうございました。グローバル化して世界の中で戦っていくためには、やはりとんがった企業であり、とんがった人材を使いこなしていく。そういうことでやっかないと生き残ってはいけなないと。そういう生々しい、また非常に厳しいお話がございました。ところでちょっと質問ですが、会社の中でとんがった人材に活躍してもらうというのはなかなか難しいですね。

西岡氏／やはり経営者がとんがってないと、だめじゃないかなと思います。

松浦氏／同感です。

雲井／大企業というのはとんがった特色のある人材が欲しいと言っておきながら、とんがった人材を生かしきれていない気がします。いわゆる「いい子」というのはすぐ環境に順応してしまいます。空気を読んでいつの間にか角をなくしてしまうというのが多いです。とんがった人材がとんがった良さを残したまま、活躍してもらうのは、現実には結構難しい。

松浦氏／ですからもう大学も行政も、どんどんとんがればいいですよ。目立たないなら目立つような努力をすればいいだけですので、大丈夫だと思います。

雲井／はい、ありがとうございます。それでは再び小山町長、お願いします。

小山氏／私どもの町、南伊勢町は人口が1万4000人弱で、そして一般行政職員は150名弱です。こういう町であっても、例えば人口10万人都市で何百人か職員がいるような団体と同じような行政サービスをやっていく必要があるということは、日々の行政サービス、そしていろんな地域づくり、政策づくりにかなり厳しい面があります。なかなか地域における独自の政策が進まないというのが今までの課題だったと思います。今、南伊勢町は三重大学さんと包括協定を結んでいただいております、地方創生に関することはもちろんですが、高齢者福祉、地域産業、そして南海トラフ地震、津波関係の防災対策、また高校の活性化や、地域づくり、そして地域人材の育成と、いろんなところでかなりご支援をいただいております。そして実際に地域に入っていただいて、職員と一緒に新たな政策に取り組んでいます。そういうことで私が見てもここ数年で職員力がかなり上がってきたなというふうに思います。今までやっていた仕事にもっと自信を持って次の仕事に取り組める。小さな成功体験というのが出てくるのだと思いますが、そういう実績が上がってきていると私は思います。ですから今のままずっとやっていたらいいなと思います。また、地域づくりについてですが、地域づくりというものは、かなり以前から村おこし、地域おこし、まちづくりなどとして、今は地方創生ということですが、ずっと続けてきています。南伊勢は1960年から人口がずっと下がりに続いていますから、地域づくりをずっとやってきているのですが、やはりここにきて今までのような地域づくりではなくて、今の時代の変化を見越してどういうふうにして地域に活力を持たせるかということを見ると、やっぱり地域づくりにもイノベーションを持ってこないといけないと思います。それには、外からのいろんなアプローチが欲しいと思います。そういうことを高等教育機関には期待したいと思います。それと今、1次産業においても、今までより、より世界との距離が近くなっているということにわれわれ気がついていません。TPPの問題もそうですけれども、世界との関わりの中にあるということが全然わからず、今までと同じような生産の仕方をしているということ、実際に仕事を進める中で、本当に身近で起こっていることを知らせることができると新たな取り組みが進む可能性もあります。そういう意味では地域における若手人材の育成というのは非常に期待していますし、今、南伊勢町ではまちづくりのリーダー研修をやっていただいておりますけれども、そこに今まで個々で取り組んでいた若手が集まって、自分たちの体験とか夢を話し合っている中で、新たな取り組みが出てくる可能性を今感じています。そういう意味ではこういうことを高等教育機関に期待したいなというふうに思います。

雲井／ありがとうございます。では続きまして末松市長、お願いします。

末松氏／最初に申し上げましたとおり、鈴鹿市内には4つの高等教育機関がございまして、それぞれの高等教育機関の皆様方の中で特色性、専門性を持った人材を現在も輩出していただいております。本市の事業につきましても、それぞれの高等教育機関との協定締結、共同研究、あるいは産学官連携の中で知恵を出していただきながらネットワーク作りを進めている中で、地方創生、地域創生にも非常に活躍が期待できる人材を輩出していただいているというふうに思っております。ただこれからもう一つ大きな枠を超える中で、先ほどから、「とんがった人材が」というお話もございましたけれども、行政の中にもやはり最近はとん

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

がった人材が少なくなってきました。また今の若い職員を見ていますと、人とのコミュニケーション、対応する力は非常に優れていますし、デスクワークも優れています。でも文書が書けない人材が非常に増えてきています。それからルールに縛られすぎて、少し冒険をする者が減ってきている。あるいは地域の人たちと粘り強く対話ができるかといったら、そこにもちょっとクエスションがつくというようなことがあります。先ほど歴史を知るといふふうにお話をいただきましたけれども、しっかりとその歴史を知っていただき、行政とはどういうものか、あるいは地域とはどういうものかということ、これからそれぞれの高等教育機関の中でまた一から十までしっかりと教えなきゃいけないのかなと思いますが。最近、それくらい教えないとネットワーク作りにはつなげていけないのかなというふうにも思います。順応性が高く、大変知識の高い、素晴らしい皆さん方、若い方たちが育っておられますので、その方たちにもう一つ探究心や創造心というものが湧き出るような人材に育っていただきたいなと思います。まさに企業アンケートを取りますと、粘り強く創造できる、あるいは会社をしっかりと知ることができる、それからどんなことがあっても素直に勉強ができる、取り組みができる、そういう方たちが欲しいということがそれぞれの中小企業の皆様方からのアンケートで結果が出ています。そういう人材をこれから育てていただける、今までの専門性にプラスアルファそういうような地域のイノベーション、地域の創生ということに取り組めるような人材育成というものをぜひお願いをしたいなと思っています。地域創生に向けた人材育成については、全国の大学でも取り組んでいただいておりますので、即効性が出る人材を発掘できるというふうにも思っておりますし、そういうふうなことをこれから行政もしっかりと活用していきたいと思っています。また、東日本大震災以降、災害後の地域がどのように残っていくかということが注目されているところでありますので、そういうようなことをぜひ大学の中で教えていただきたいです。私、NHKで放送中の、『あさが来た』のドラマが大好きなのですが、「あささん」みたいに活躍する女性のみならず、男性も「何でもす」と、どんどん言えるような、そういう人材が出てきていただきたいなというふうに思っております。

雲井／ありがとうございます。それではいろいろな意見が出ました。やはり人材ということになると様々な意見が出てきますけれども、例えば今、市長から話があったように片方で素直に言うことを聞く有能な人が欲しいという一方で、とんがった能力を持った人と、なかなかこれは相矛盾しているようなところもありますし、広くそれでいて深い思考力と一般教養を身につける、歴史を知れ、盛りだくさんでなかなかこれを全部クリアしていこうと思うとスーパーマンにならなくてはならない。そんな人材はそういるものではないと思いますけれども、教育界からのお立場ということで、納谷先生に、このあたりの事情についてどう考えれば良いのかお話を伺いたいと思います。

納谷氏／私は、生まれは戦前ですけど、戦後教育の一期生です。アメリカンドリームというムードの中、何かやればどんどん夢が膨らんで成功していくことを信じて生きてきた人間です。最近ある人に聞いてびっくりしたのですが、「先生の時代はそれでいいけれども、今の大学にくる子の親は、どう時代を生きてきたか」というと、バブルのときです。人口もそうです

し、いろんな活力も最高の時代、トップのところのいたわけですから、これを守るといふ方へどうしても意識がきて、そこから出ていくことができない」というわけです。今の社会的な事情の中で、子どもたちが親を見る。子どもたちは受験勉強で追い詰められますから、「あまり自分のことを出してしまうと大変だ」といふ子が多いのではありませんか」と言われて、なるほどそういうことだなと思いました。ただそんなことでは、日本が弱くなることも間違いないので、そんなことでは困ると思います。では、どうしたらいいのか。明治大学は皇居のすぐそばにあります。若者がどんどん来るには、立地だけではなくて、そこでどういふことを伝えるかということが大事です。時代の流れとか、そういうものを敏感に感じる。次に何を学んでいかなければならないか、知る機会を与えるということが明治の役割です。そういうところで特色を出して、若者が来ていたのではないかなと思っています。そういう形で人が東京に集まる。東京には大学がたくさんありますので、ただ立地が良ければいいというものではない。このことを、まずご了解いただきたいと思います。とにかく大学は学問をすることです。学問というものは、新しいものを作り出していく、過去の集積をきちんとフォローして新しいもの作っていく。けれども、学生はその言葉どおり、生きていくための学びをする者です。そういうことをする教育の場が大学です。だから、そういうチャンスを学生に与えるような先生方になってもらわなければいけない。しかし、先生方も特別な研究テーマに特化していかないと、世界にとんがったような研究の発表ができない。研究なくして、教育していくことは、なかなか難しい。これも確かにあります。その調和を、今回の事業をとおして実現してほしい。このことを自覚し、意識改革をしてもらうということが必要だと思います。先ほど、社会が変化しているから考えてほしいと申しました。あれだけ変化していたら、従来の学問をいくら学んだとしても、現代社会では役に立ちません。それを超えていく力も、同時に教えてあげなければいけない。いろんな知恵を学んでいく機会が必要で、それを大学でぜひ設けていただければと思っております。いずれにしても、大学は特色をきちっと持っていることは大切です。先生方は多様性をそれぞれ持つ。それを束ねるのがリーダー力です。企業も自分の企業だけよければ、特化していればいいというわけにいかない。三重県なら三重県の全地域に適した企業といふか産業は、こういうふうにあるべきだといふことがまとまって、横の連携をしていかないといけない。どんなに強い企業でも、いずれ世界を相手に戦うときに、うまい仕事があるかと評価した企業、とくに国外から入ってくる企業が出てきて、戦いになるわけですから。三重でなければできないといふ、そういうものを早く探して、何が大切か、三重にはこういうものがあるといふことを、三重大学のほうで地域に発信し続けて、ぜひこういう人材を作りたいから来てほしいといふことも発信していただきたい。そして会場には、企業の社長さん、市長さん、町長さんもおられますけども、こういう方々にも理解していただいて、集まって、何を作れば、ここら辺全体が強くなるといふことを考えていただく。その場として大学を使ってもらいたい、大学教育を補完していただきたい。そんなことを考えております。

雲井／はい、ありがとうございます。納谷先生がおっしゃったように、世の中の変化が激しいですし、多様な人材を迅速に養成するというのは非常に難しいわけです。日本人論といふ中ではよく日本人といふのは「本音」と「建前」とか、「うち」と「そと」とか、こういっ

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

た日本人論の議論がございませうけれども、結局、日本の伝統的な組織では内輪にこだわり、自前主義でやっていく。これが日本の強みではあったのですが、非常に変化の激しい時代、逆にそれが足を引っ張ることもなってきています。そこで、組織を超えていろいろな大学が協働して、従来のパラダイムを壊しながら新しいものを生み出していくことが重要だという感じを受けているのですが、その辺いかがですか。

納谷氏／私もそのように思っています。それで皆さんに言いたいことは、今の若者には閉塞感があるといわれています。「この地域では弱いんじゃないか」、「どこかに行かないと」という気持ちはあるけれども県外に出られない。でも世界のいろいろな地域から三重の産業を見たら、三重からの企業にたくさんきてもらいたいという地域があります。ビジネスがいっぱいあります。だから世界へ開放していくように人材を作る街、三重県はこういう県だということが発信できれば、ここへ集まってから、世界に出ていくわけです。今、ITがこれだけ発達している時代ですから、もう昔のようなどころだけではものが進まない。そういうことも含めて世界を見れば教えること、興味を持つことがいっぱい出てきます。それを教えてくれるところが三重県だと。それを今、三重大学にお願いしています。私は伊勢神宮に明日行きます。かつて、皇学館に行き講演をしたときに、この地には、こんなにすばらしい伝統があっ、世界的に注目されている文化がある。なぜ表に出さないのかと言ったこともあります。だからそういう誇りを持つことと、それを発信していくという力を結集していけば、色々出てくるのではないかと。真珠一つにしたって大変です。世界的に、三重のここから出てくる真珠を皆さん買いたいと思っている。世界のあちこちで黒真珠を作ったり、いろんな競争をしたりしています。それでも戦いをしなければならぬ。そういう時期がきているということをしっかり自覚してやっただけならばと思っております。本当に期待しています。

雲井氏／ありがとうございました。この頃はインターネットあり、SNSあり、いろんな発信手段がございませうからね。国内はもとより、海外へも一瞬にして情報が飛んでいってしまいうから、そういうものを有効活用すれば、地方に住んでいてもハンディは余りない。では次に個別のテーマについて掘り下げていきたいと思っています。自治体から市長さんや町長さんが来られているので伺ってみたいと思っています。この頃は職員もいわゆる「いい子」になってきたという、とんがった人が少なくなってきたというお話もありました。もう6年、7年になりますが、私も三重大学で非常勤講師としていろいろ学生に講義をしております。「世の中が求めている人材」といったテーマで講義してきましたが、その講義の中で「どこで仕事をしたいですか、一番したい仕事は何ですか」と質問すると、地元に残りたいという人が意外に多い。世界を目指そうという人、中央へ出て第一線で働きたい人がもっというても良いと思うのですが、余り手が挙がらなくて地元を目指したいと。地元に残りたい人の一番いきたい職場はと質問すると、県職と、市町の職員に手が多く挙がります。特に女性には人気ナンバーワンの職場になっております。この傾向についてどう思われますか。

末松氏／三重県のことをよく知っている地元の方たち、県外から来られて、この大学で学び三重県の知識をしっかりと得た方たちに行政職員になっていただけたら、それはもう本当に

鬼に金棒というか、大変助けになることだと思います。ぜひ行政職にもたくさんの方に挑戦をしていただきたいと思います。最近、国の政策など、どんどんシステムが変わってきています。地域包括ケアシステムでもそうですし、先ほどの TPP の話でもそうですけれども、どの分野においても法律などが目に見えないぐらいのスピードでどんどん変わってきていますので、そういうことにどんどんついていかなければならないという意味で、法律などを素直に勉強する姿勢を身につけていただきたいと思います。先ほどちょっと申し上げたのですが、そういうことがきちんと身につけていると、行政の職員として即戦力になれると思います。また、これから行政だけではできない仕事がたくさん増えてくると、地域の皆さん方とどうやって連携して行政サービスを向上していくかということになってまいりますので、そういった意味では地域の皆さん方にどうやって溶け込むかということがこれから重要になってくるのかなと思っています。人がどんどん少なくなってきましたし、私どもの市では行政職員が 1400 名をちょっと超える体制でありますけれども、これから増やすということはできないので、その中で国から降ってくる膨大な仕事をどうやって少数精鋭でやってくかということが求められてきます。そういう中で、ぜひ若い方々のお力をお借りしたいと思っています。入っていただくのもしかり、そうではなくて地域連携、先ほどのお話にもありましたが COC+ の中で南伊勢町さんは大学と包括提携をされておりますけれども、そういう意味でも大学と連携というのが、これからの行政と大学の皆様方との、本来の COC+ というところでの三重県モデルになっていけるのではないかなと思います。そういう意味で行政を選んでいただくのは大変うれしいです。その分ワークライフバランスや、子育てがしやすい環境、そういうものもしっかり私どもも立ち上げておりますので、ぜひまたご協力をいただきたいと思います。

小山氏／南伊勢町では、過去 3 年ほど前まで課長職で定年退職が結構増えたので、多くの採用をしていました。行政職員数は 150 人弱のところですが、年間 13、4 人採用をしていました。若い人たちがどんどんきてくれてすごくうれしいですし、女性が多くなっています。それは地域に残りたいという気持ちの表れだと思います。実際に試験をすると女性のほうが成績がいい傾向ですが、地域の中学校とか高校の子たちに聞くと、地域に残りたいという女性はかなりいます。その子たちは高齢化の進んだ地域の家庭の実態を見ているのだと思います。地域のお年寄りのために自分は働きたいという子どもが増えてきているように思います。平成 12 年に地方分権一括法が施行され、その前の分権計画もそうですが、その後ずいぶん経って、やっと地方分権が根つき始め、地域をどうつくっていくかということが地方にも根つき始めてきたのかなというふうに思います。もう十数年経っていますが、そういう意味では大学のほうでも地域政策とか、また地域をフィールドにさせていただいて、研究者の先生方が地域の現場でいろんな仕事に関わっていただいたことで、だんだん変わってきたなというふうに思います。そういう意味では地方公務員というか、市町村の職員で本当にその地域のことを何とかしたいと思う純粋な気持ちをもった方が増えてきて来ていると思います。私のほうでは職員の年齢構成を見るとある一定の層が少なかったものですから、U ターンも含めて社会人卒の採用をしています。役場の中に若い力をいい年齢構成で採用するということが制度的に続く。そしてまた先輩から後輩へ、いろんな勉強をしながら続けていくことができます。ただ、一つ問題は専門的知識。専門職の採用というのが、私のような小さいとこ

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

ろもそうですが、結構大きい自治体でも採用がなかなか難しいというふうに聞いています。ですが、例えば南海トラフの地震、津波があってあの東北の地域のように南伊勢がなったとして、そのことを踏まえて今、将来のまちづくりをどう考えるかという、都市行政の知識を持った人が必要なわけです。ですが実際にそういう人を採用できるかっていうとなかなか難しいということから、地域が必要とする人材、大学できちんと専門知識を学んだ人に来てもらうということは非常に大事なことだと思いますし、市町村にはその人にとっての活躍する場があります。そういう人たちは地方自治体ではその地域の人のために本当に一生懸命働くことができるし給料も保障されています。ぜひそういう人材をよろしくお願ひしたいと思います。

雲井／ありがとうございます。公務員は仕事が楽で安定した職場であると言われた時代もありましたが、これは過去の話しということですね。この頃、県外の第一線で働いていた人がIターンで三重に来て、地方公務員として採用される人が増えていると聞きます。チャレンジングで、異質、いわゆる、とんがった人材を職員に登用していただくもの地域活性化のためには大切なことだと思いますので、ぜひお願ひしたいですね。

末松氏／最近、県外から三重県に来ていただく行政職員の方たちが多いです。昔みたいに地元卒という卒はありませんので、そういう意味で県外職員の皆さん方が非常に多くなってきている、そういう傾向があります。それだけ三重県に魅力があるのかなというふうに思っております。

雲井／それはいい傾向ですね。

納谷氏／地元にいるとわからないですよ、良さが。だけど自分の働く場所がある、何かがあると思えば、人は来るんです。ですから、そこは大切だと思います。見方を変えれば、いろんなことの仕事が新しく出て、あそこに行ったら、自分はこういうことができるという夢を抱いて来る人たちも多くなると思います。もうこの時代になったら、見方を変えれば仕事がいっぱい出てくる。行政も新しい公共というのでしょうか、今まで市でやるようなことを民間に委ねていろいろやっていかなければならない時代に入ってきています。そういう仕分けの違いも、どんどん考えておかなければならないと思いますね。そこを踏まえて人材養成もしなければならぬ。生きがいがある仕事だと感じれば、若者はどんどん集まってくるだろうと私は思います。そういう県にする潜在能力が三重にはありますから、ぜひやっていただければと、私は願っております。

雲井／ありがとうございます。大変示唆に富んだご発言です。先ほどからの議論のキーワードは、きらりと光る、人を引きつける仕事なり、魅力を作ること。これがいい人材を呼び込む。それが地域のプラスに作用する。その意味では今日最初にご登壇いただいた山本さんと田口さんが博士後期課程を出られたお二人が図らずも、県外の方ですね。そして三重県で今お仕事をされている。これは何よりの証明ではないかなと思います。だいぶ時間も迫って

きましたけれども、西岡さんのほうから一言コメントいただきたいと思います。

西岡氏／いろいろな学びを今日もいただいてありがたいと思っています。私一つこの事業の中で感じているのは、参加企業の数です。三重県としてあまりにも少ないのではないかと。いつも顔触れが同じということもありますので、ぜひこれは枠を広げていただいて、数も増やし、種類も増やし、そして学生さんにもいろんな企業を知っていただくという、そういうふうにしていけばこの事業の裾野が広がるのではないかなと思いますし、活力が増えるのではないかなと感じますので、ぜひご検討いただければと思います。

雲井／それでは松浦さんも一言お願いします。

松浦氏／私も西岡さんの意見に加えてこのCOC+、47の取り組みが全国であります、私たち企業の場合はよいところのよさを認めて学びに行くベンチマークという考え方があります。ほかのCOC+の事例も学びながら、よいところはどんどん取り入れていかれるべきだと思います。だから、例えばもう事業協働機関と一緒に何か共同研究をやったというようなことは、国は求めてないと思います。それを一緒にやったことによって地域がどう変わったかというような明るい成果を、そのいろんなコラボレーションが必要だと思います。私たちも非力ながらどんなことでもやりますので、事業協働機関として参加してあの企業かつこいいな、うちも参加したいんだということで1社ずつ増えていくのが理想だと思います。最後に私から一言。日本人はとかくもうまじめすぎると思います。でもこのまじめということが成果につながっていたら、日本はもっともっと成長し続けています。まじめだけでは成長しなくなった今こそ、私たちはまじめより思いやりを大事に、自分以外の他者を考えながら地域を考えることを重視するべきではないかと思います。こういったことがCOC+三重県バージョンで成功することを私は祈っています。以上です。

雲井／ありがとうございました。会場から手が上がっておりますのでお聞きしたいと思います。

来場者／津で宝石の商売をさせていただいているものです。中小企業の一員として聞かせていただいたのですが、大学の皆さんですとか、行政の皆さんが話されていたこともよくわかりますが、正直、地方ですとか、中小企業の現場はもう待たなしで本当に危機感を持っています。先ほど真珠の話も出ましたが、もうあと10年で次を継ぐ世代を作らないと真珠産業とか本当になくなってしまいます。そういう危機的な状況にある地方の伝統産業とか、中小企業が世代の壁を超えられないというところに若者をぶつけなければ、何が地域創生なのかなというふうに思ったところが正直なところなんです。ですので、ぜひこれからインターンシップ等でされるとは思いますが、できればこういう会議にも出ていかれない地域で、もう待たなしでされてらっしゃるような取り組み、各地でやってらっしゃいますので、そういうところに1人でもいいので若者を送り込んでいただければ三重の地方も、そういう地場産業ですとか、伝統産業も世代の壁というのを超えていけるのかなというふうに思っております。

■パネルディスカッション

「三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～」

雲井／ご意見ありがとうございました。COC+の事業ですけれども、インターンシップをとおして、学生たちに身をもって体験してもらうことが柱の一つになっています。そういう意味からも、企業様には、情報を教えていただく、あるいはインターンシップの学生を受け入れていただくということをお願いに伺うことになるかと思えます。最後にこのCOC+を推進するため、私も先ほど自己紹介したときに地域活性化推進統括推進コーディネーターと申しましたけれども、三重県は広いですので、私の他に5名が地域別の推進コーディネーターに任命されました。合計6名のコーディネーターが教育機関、市町、企業、各種団体等を訪問して、様々なお願いに伺うことになるかと思えますので、何卒よろしくお願い申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

閉会の挨拶

司会：山本／ありがとうございました。さまざまな観点からたくさんのキーワードをいただいたように思います。ファンタジスタがファンタジーで終わることのないように、というきついお言葉もありましたので、それを肝に銘じたいと思いますし、山下さんの大学の授業が安心感を与える授業になってほしいというのも新鮮に聞こえましたし、最後フロアのほうから質問を投げかけていただいた、そういった切実感もしっかり受け止めながら、これからの事業を本当に県として一体となっていきたいと思います。その連携の作り方ということも大きな課題になると思いますが、そこをしっかりと踏まえながら一步ずつ着実に進めていきたいと思いますので、皆様本当によろしくお願ひしたいと思います。今日は本当にありがとうございました。最後に研究担当理事のほうから閉会のご挨拶があります。

鶴岡／このシンポジウムで三重大学に対して非常に有益なお言葉をいただきました。本当にありがとうございました。それから会場いっぱいの方々に最後まで聞いていただき、非常にありがたいと思っています。このCOC+の事業、今のシンポジウムでわかったと思いますけど、やはり三重県の高等教育機関全部、それから三重県、企業の人たち、この熱意がないとできない事業であり、これを理解していただいたと思います。センター・オブ・コミュニティーというのは地（知）の協働体に対するセンターになるのだということです。このときに重要な要点は、地方の協働体のためになるようなセンターを作らないといけないということだと思います。これを実現するために、これからも邁進いたしますので、今後ともご協力をお願いいたします。どうもありがとうございました。



三重大学研究担当理事

鶴岡 信治

おわりに

司会：山本／鶴岡理事、ありがとうございました。これを持ちまして今日のキックオフシンポジウムすべての日程を終了いたしました。長時間にわたり本当にありがとうございました。改めてパネラーの先生方に大きな拍手をお願いいたします。これからもこういった催しを数多く皆さんと作り出していきたいと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思います。重ねてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

当日の様子



第1部



企業等との共同研究による製品の展示



第2部①



第2部②



会場の様子②

關係資料



地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）
「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」に係る協定書

三重県及びCOC+参加大学は、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」の実施にあたり、以下の内容について協定を締結する。

（目的）

第1条 地域のさまざまな主体との多面的な視点からの対話を通して問題発見力と解決力を強化し地域を創生する人材（ファンタジスタ）を創出する。

（定義）

第2条 「COC+申請大学」は、国立大学法人三重大学（以下「三重大学」という。）とする。

2 「COC+参加大学」は、本事業に参加する全高等教育機関とする。

3 「事業協働機関」は、本事業に参加する全高等教育機関、企業・団体及び三重県とする。

4 「COC+事業推進会議」は、本事業の企画、運営、成果の検証、改善策の検討等を所掌する。事務局は、三重大学に置く。

5 「教育プログラム開発委員会」は、事業協働機関の実務担当で構成し、教育プログラムの開発、運用、改善等を所掌する。事務局は、三重大学に置く。

6 「外部評価委員会」は、事業協働機関に属さない有識者及び県内ステークホルダー等で構成し、事業の実施結果の評価を所掌する。事務局は、三重大学に置く。

（有効期間）

第3条 本協定の有効期間は、協定締結日から平成32年3月31日までとする。

（目標）

第4条 事業目的の達成に向け、以下の各号のとおり事業目標を設定する。

① COC+参加大学地元就職率

平成26年度 49% → 平成31年度 59%

② 事業協働機関へのインターンシップ参加者数

平成26年度 75人 → 平成31年度 150人

③ 事業協働機関雇用創出数

平成31年度までに 30人

■関係資料

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）

「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」に係る協定書

（COC+申請大学の役割）

第5条 COC+申請大学である三重大学は、他の事業協働機関との連携の下、以下の役割を担う。

- ① 事業責任大学としての事業運営と総合調整
- ② 「食と観光産業分野」、「次世代産業分野」、「医療・健康・福祉分野」における「三重創生ファンタジスタ」資格認定副専攻コースの創設、及び同資格の普及
- ③ 推進コーディネーターの配置、及び推進コーディネーターを活用した参加大学における地域志向科目開講、インターンシップ先・就職先の開拓、学生の地域活動支援、共同研究の推進等
- ④ COC+事業推進会議、教育プログラム開発委員会及び外部評価委員会の庶務

（COC+参加大学の役割）

第6条 COC+参加大学は、他の事業協働機関との連携の下、以下の役割を担う。

- ① 地域で必要とされる人材の育成
- ② COC+参加大学地元就職率向上に向けた取組の実施
- ③ FD、SD、シンポジウム・研究会等の共同開催
- ④ インターンシップや就職及び実務家教員や地域課題の専門家に関するデータベースの構築
- ⑤ COC+参加大学のIR機能の強化に向けた共同事業

（三重県の役割）

第7条 三重県は、他の事業協働機関との連携の下、以下の役割を担う。

- ① インターンシップの受入
- ② 地域志向科目開設に向けた人材派遣
- ③ シンポジウム・研究会等への協力
- ④ 高大連携（オープンキャンパス等）、合同進学説明会の充実
- ⑤ 全高等教育機関と県で組織するコンソーシアムの創設に向けた総合調整と参画
- ⑥ 「三重県高等教育機関魅力向上支援補助金」の創設・運用
- ⑦ 地域と高等教育機関の魅力発信のための情報冊子の作成・配布

（成果の検証）

第8条 COC+申請大学は、毎年度の事業の実施結果を外部評価委員会に報告する。外部評価委員会は実施結果の検証を行い、必要があれば、COC+事業推進会議に改善策等に関する意見を提出する。

平成27年12月24日

津市栗真町屋町 1577
三重大学

学 長

駒田美弘



四日市市萱生町 1200 番地
四日市大学

学 長

宗村南男



四日市市萱生町 1200 番地
四日市看護医療大学

学 長

丸山康人



鈴鹿市岸岡町 1001 番地 1
鈴鹿医療科学大学

学 長

豊田長康



鈴鹿市郡山町 663 番地 222
鈴鹿大学

学 長

市野聖治



■関係資料

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）

「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」に係る協定書

津市夢が丘1丁目1番地1

三重県立看護大学

学 長

早川和生



伊勢市神田久志本町1704番地

皇學館大学

学 長

清水 潔



鈴鹿市郡山町663番地222

鈴鹿大学短期大学部

学 長

市野聖治



津市一身田豊野195番地

高田短期大学

学 長

栗原廣海



津市一身田中野157

三重短期大学

学 長

東福寺 一郎



鈴鹿市白子町
鈴鹿工業高等専門学校

校長

新田保次



鳥羽市池上町 1-1
鳥羽商船高等専門学校

校長

新田保次



名張市春日丘 7 番町 1 番地
近畿大学工業高等専門学校

校長

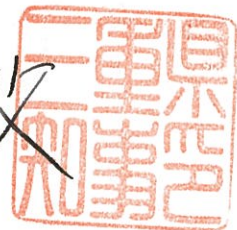
村田圭治



津市広明町 1 3 番地
三重県

三重県知事

鈴木英敬





文部科学省

地(知)の拠点

平成27年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」

地域イノベーションを推進する 三重創生ファンタジスタの養成





三重大学

教養教育機構

人文学部・人文社会科学研究所

教育学部・教育学研究所

医学部・医学系研究所

工学部・工学研究所

生物資源学部・生物資源学研究所

地域イノベーション学研究所



■ 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）

「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」事業の概要

【事業目的】

● 地域の課題に対してさまざまな主体との多面的な視点から対話をしながら、地域のイノベーションを推進できる三重創生ファンタジスタを創出する。

【数値目標】

- 事業協働地域の県内就職率を5年間で10%向上させる。
- 三重大学の県内就職率を5年間で10%向上させる。
- 事業協働機関において5年間で30人の新規雇用を創出する。
- 事業協働機関へのインターンシップ参加者を5年間で2倍にする。
- COC+参加校以外の事業協働機関による満足度を100%とする。

【県内のすべての高等学校の連携（11校）】

COC+参加校

三重大学

- ・ インターンシップ・就職データベース構築
- ・ 実務系教員・地域課題専門家データベース構築
- ・ 研究会・FD/SDの共同開催

学

官

産

三重県

- ・ インターンシップの受け入れ
- ・ 地域志向科目群への教員人材派遣
- ・ 研究会・シンポジウムの共同開催
- ・ 高大連携事業の充実
- ・ 高等教育コンソーシアムの創設に向けた調整

COC+参加企業

【個別企業（17）・企業連合体（3）】

- ・ インターンシップの受け入れ
- ・ 地域志向科目群への教員人材派遣
- ・ 研究会・シンポジウムへの協力

地域の課題解決

食・観光分野

次世代産業分野

造形・健康・福祉分野

※県内5地域にCOC+推進100パイネーターを配置

地(知)の拠点

事業協働機関一覧

COC+大学
三重大学

参加校

| | | |
|------------|------------|--------------|
| 四日市大学 | 皇學館大学 | 鈴鹿大学 |
| 鈴鹿大学短期大学部 | 鈴鹿医療科学大学 | 三重県立看護大学 |
| 四日市看護医療大学 | 三重短期大学 | 高田短期大学 |
| 鈴鹿工業高等専門学校 | 鳥羽商船高等専門学校 | 近畿大学工業高等専門学校 |

参加自治体
三重県

参加企業 ※50音順

| | | |
|--------------|-----------------|--------------|
| (株)アーリーバード | ICDAホールディングス(株) | 伊藤工機(株) |
| (株)医用工学研究所 | (有)オズ海島遊民くらぶ | (株)ZTV |
| 中外医薬生産(株) | 辻製油(株) | 日本土建(株) |
| 速水林業 | 万協製薬(株) | (株)光機械製作所 |
| (株)百五銀行 | (株)百五経済研究所 | (株)マスマグループ本社 |
| 三重県商工会議所連合会 | 三重県商工会連合会 | 三重県農業協同組合中央会 |
| (株)三重ティーエルオー | 三重テレビ放送(株) | |

MIE UNIVERSITY

地(知)の拠点

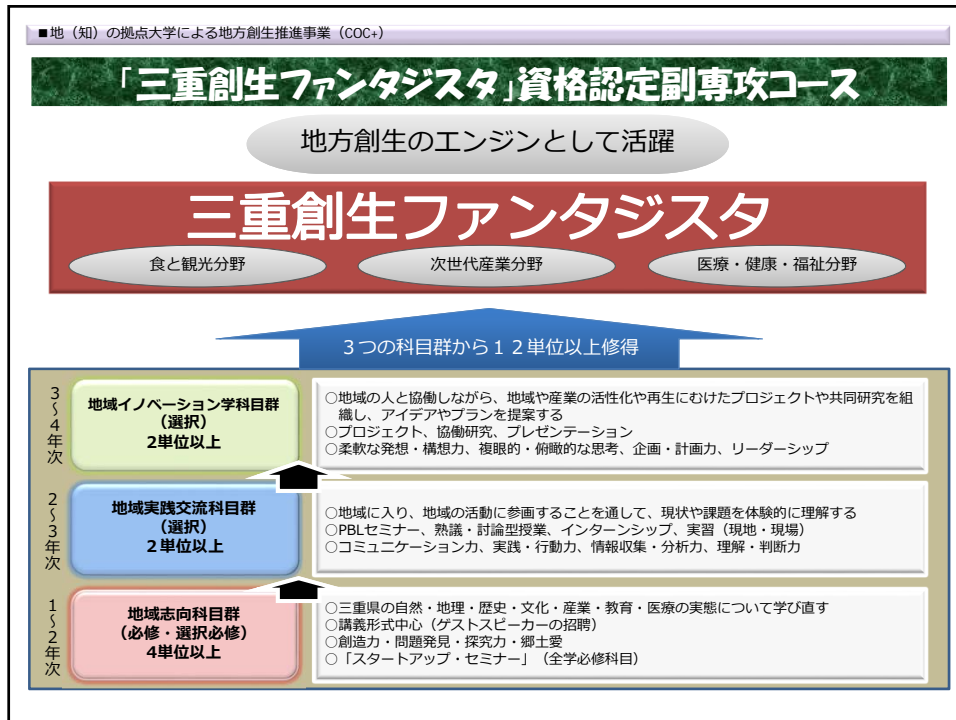
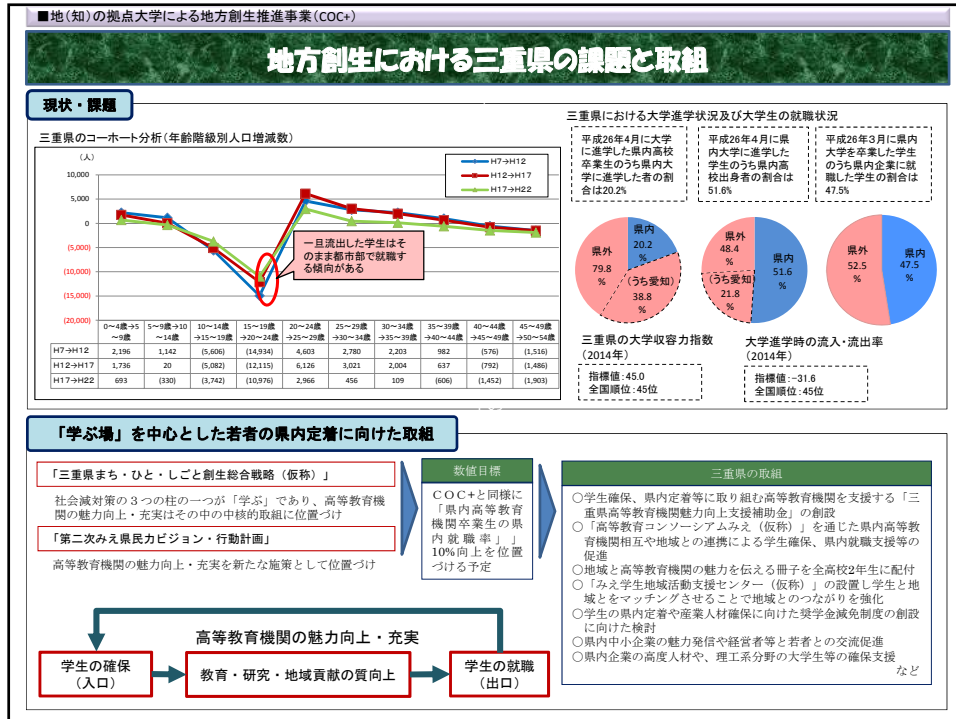
「ファンタジスタ」

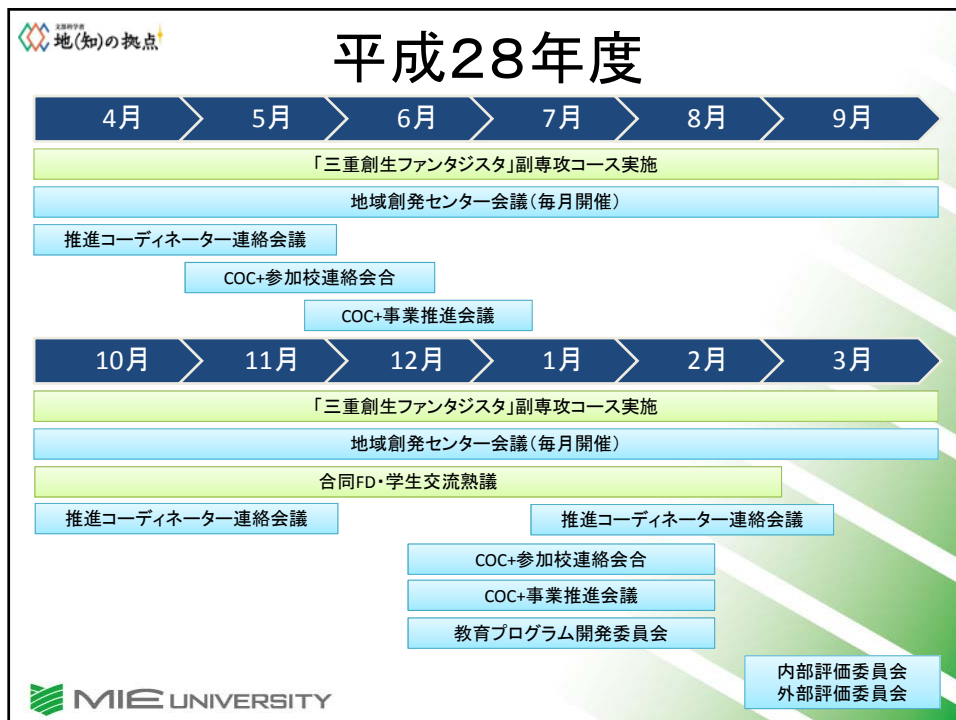
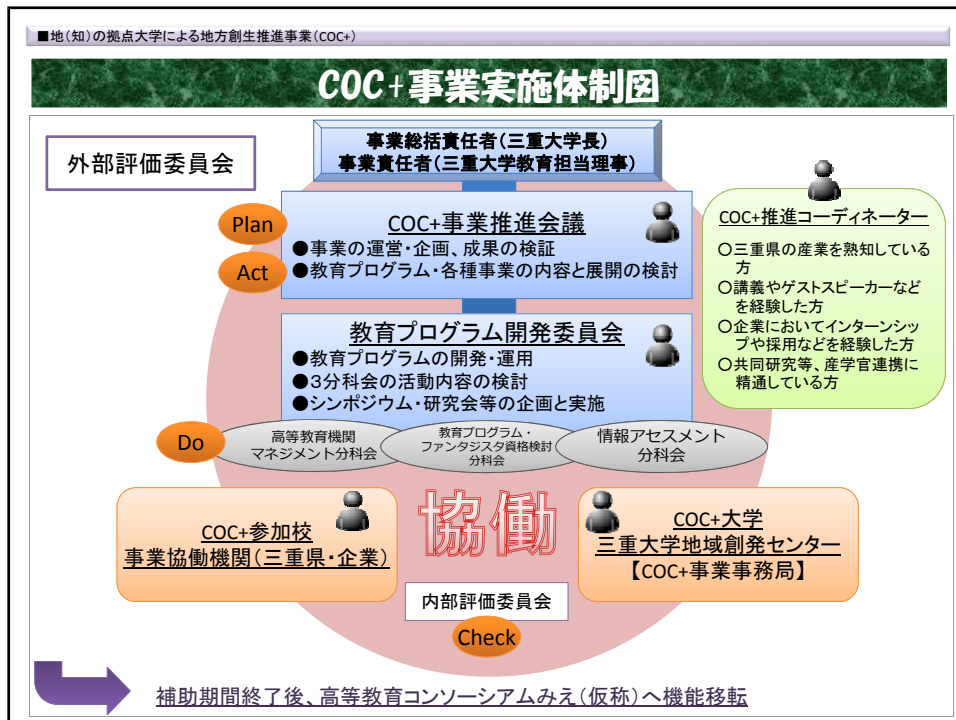
- ・ 状況や事態を的確に把握し、複眼的な視点から柔軟な創造力に富んだ発想と行動のできる人材

「三重創生ファンタジスタ」

- ・ 地域の課題に関してさまざまな主体と多面的な視点から対話しながら地域のイノベーションを推進できる人材

MIE UNIVERSITY



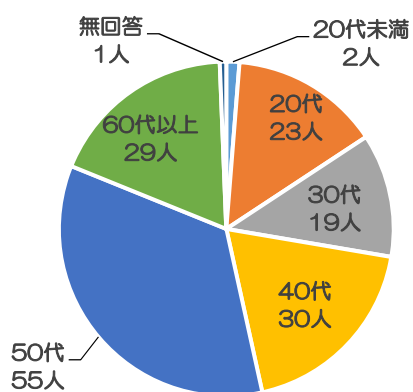


地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）
 キックオフシンポジウム アンケート結果

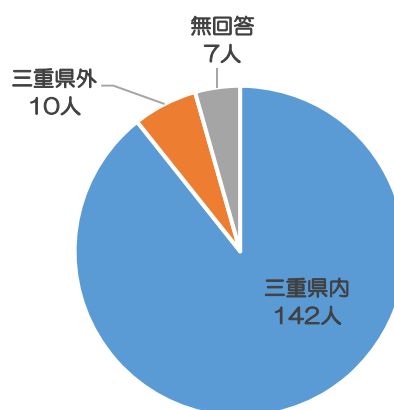
平成 28 年 1 月 23 日（土）

シンポジウム参加者数：275 人 アンケート回答数：159 人

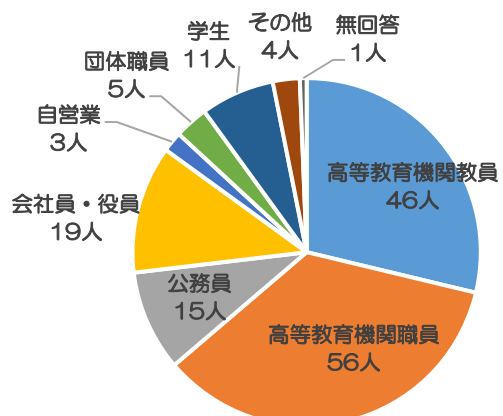
▽年齢



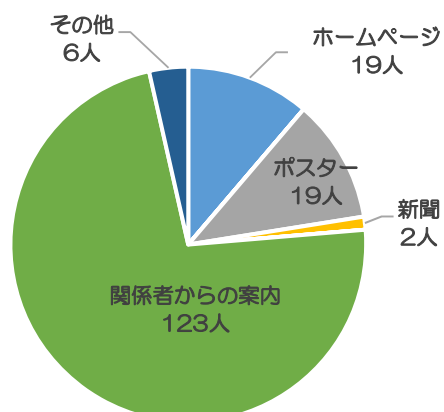
▽本日はどちらからご参加ですか



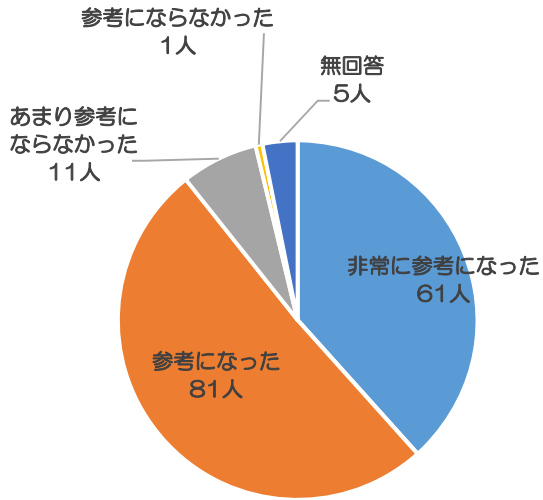
▽ご職業について、当てはまるものをお選びください



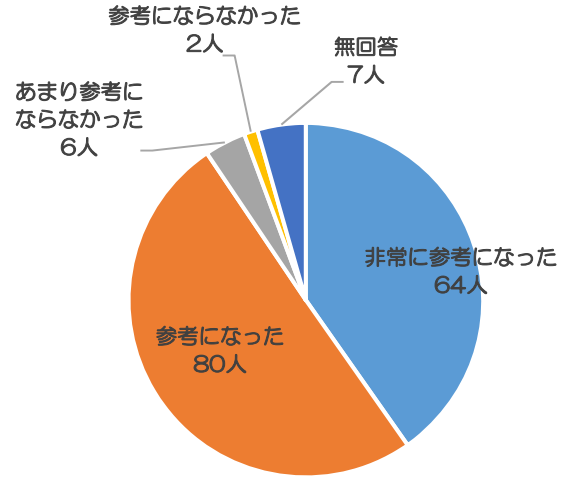
▽このシンポジウム開催に関する情報をどのようにして知りましたか



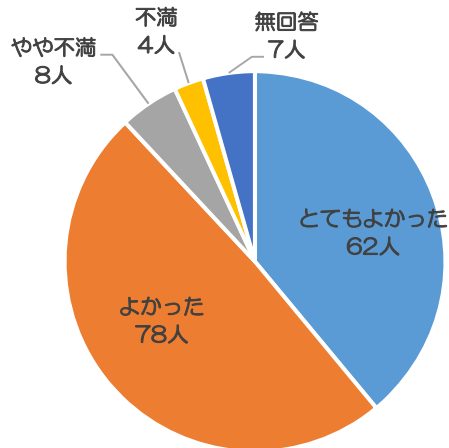
▽ 基調講演のご感想をお聞かせください



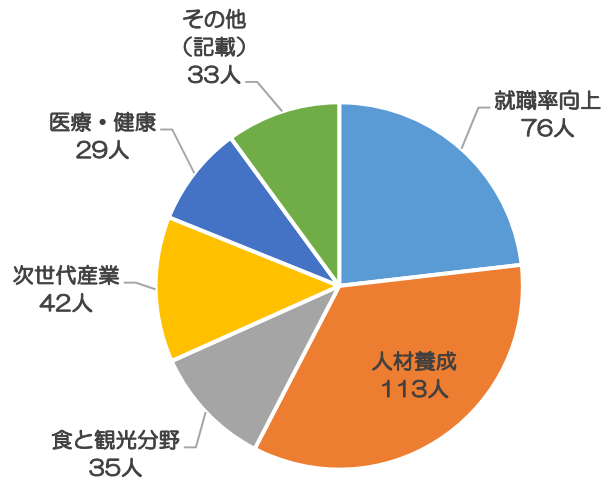
▽ パネルディスカッションのご感想をお聞かせください



▽ シンポジウム全体のご感想をお聞かせください



▽ 本事業に特に期待することはなんですか (複数回答可)



ご協力ありがとうございました。



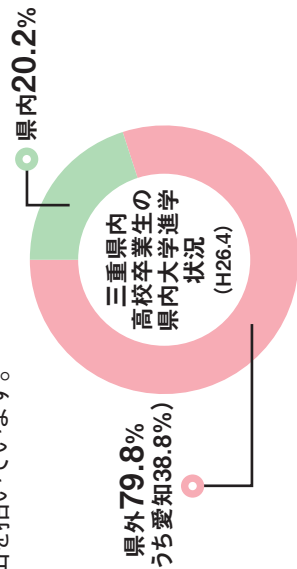
三重大学 地域イノベーションを推進する新しい力

三重創生フアンタジスタ

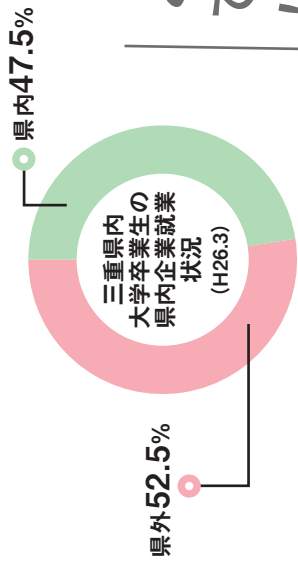
柔軟な創造力に富んだ発想と行動のできる人材が求められています! ともに地域の魅力を学び、私たちの暮らす三重県をもっと素敵なお場所に変わっていきませんか?

首都圏への若者の流出が深刻な問題に!▶

「人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる」という負のスパイラルに陥ることが危惧される昨今、首都圏との経済格差が東京への一極集中と地方からの若者の流出を招いています。



平成26年4月に大学に進学した県内高校卒業生のうち
県内大学に進学した者の割合は20.2%



平成26年3月に県内大学を卒業した学生のうち
県内企業に就職した学生の割合は47.5%

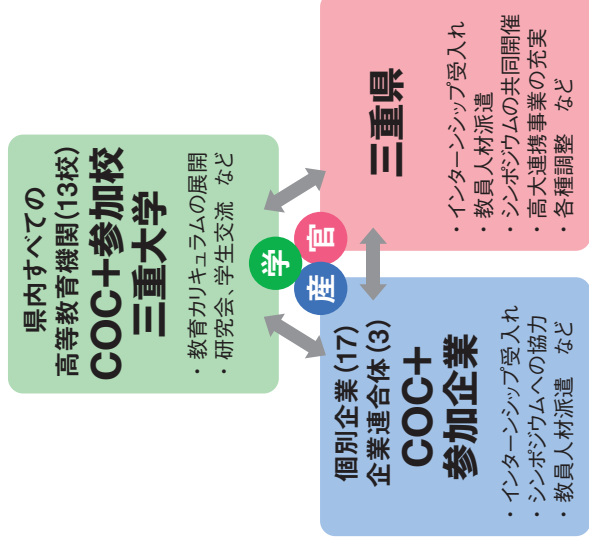
そこで!

産・学・官+民で地域イノベーション▶

地域の自治体や中小企業などと協働し、地域の雇用創出や学卒者の地元定着率の向上に関する計画を策定しました。それが...

地(知)の拠点大学による 地方創生推進事業(COC+)

三重大学が中心となり産・学・官・民が
一体となったオール三重体制で連携し学生をサポート



三重創生フアンタジスタを養成▶

三重大学では平成28年度より
「三重創生フアンタジスタ」
資格認定副専攻コース
スタート!

三重県の地域や産業の課題発見と解決方法を
地域や現場の人たちと多面的なコミュニケーション
を図りながら、今後の三重県を展望しつつ、三重県
の新時代を切り拓くことのできる人材の育成を目指
します。

地方創生の
エンジンとして活躍

地域イノベーション学
科目群(3~4年次)

地域実践交流
科目群(2~3年次)

地域志向科目群
(1~2年次)

三重県の新時代を切り拓く!!

雇用の創出と若年層の県内就職率の向
上につながる持続可能な地域の活性化と
開発のため、三重創生フアンタジスタが3つ
の分野のリーダーとなり、地域のイノベーショ
ンを推進します。

食と観光
分野

次世代
産業分野

医療・健康・
福祉分野



【事業の数値目標】

- 県内卒業生の県内就職率を5年間で10%向上
- 三重大学の県内就職率を5年間で10%向上
- 事業協働機関へのインターンシップ参加者を5年間で2倍に

三重創生フアンタジスタを創出!

地(知)の拠点大学による 地方創生推進事業(COC+) キックオフ シンポジウム

三重県における地方創生を考える
~これからの三重県が必要とする人材とは~

【日時】2016.1.23(土) 13:30-16:30 【会場】三重県庁講堂

PROGRAM

- 13:30~14:00 開会挨拶・事業説明(三重大学長、三重県知事、文部科学省挨拶)
- 14:00~14:40 基調講演
[地方創生とCOC+事業の意義と期待] 納谷廣美氏(前明治大学学長)
- 15:00~16:30 パネルディスカッション
[三重県における地方創生を考える
~これからの三重県が必要とする人材とは~]

入場無料/申込不要/定員200名

三重大学は、地域イノベーション大学として、地方創生、地域の活性化に取り組んでいます。今回のCOC+事業計画の策定には、三重県、県下の29市町、県内高等教育機関、および企業の皆様方に全面的にご協力をいただき、協働して取り組んでいく予定です。鈴木英敬三重県知事、および県下29市町の首長様には直接お会いして、COC+事業を含む三重大学の機能強化構想にご協力いただくことをお願いしました。と同時に、地方創生における三重大学の責務がいかに重いものであることも痛感しました。三重大学は、「三重県における地方創生の地(知)の拠点」として、不退転の決意を持って、本事業に取り組みたいと思います。

三重大学学長 駒田美弘



【事業協働機関】 教育機関 四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、三重県立看護大学、三重県立看護大学、四日市看護医療大学、鈴鹿大学短期大学部、三重短期大学、高田短期大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校、近畿大学工業高等専門学校 【自治体】 三重県企業等 (株)アールパード、ICDAホールディングス(株)、伊藤工機(株)、伊藤工業(株)、(株)医用工学研究所、(有)オズ海島遊民くらぶ、(株)ZTV、中外医薬生産(株)、辻製油(株)、日本土建(株)、速水林業(株)、万協製菓(株)、(株)光機械製作所、(株)百五銀行、(株)百五経済研究所、(株)マヤグループ、三重県商工会議所連合会、三重県商工会連合会、三重県農業協同組合中央会、(株)三重ティーエルオー、三重テレビ放送(株)

お問い合わせ / 三重大学 地域創発センター 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577 TEL 059-231-9056

E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp



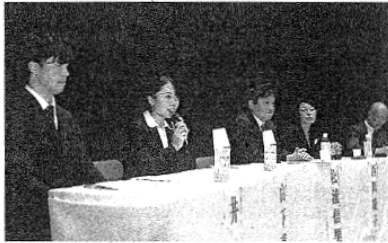
文部科学省
地(知)の拠点

本プログラムは、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」を基盤に構築されています。

三重大生と首長ら 地方創生でシンポ

200人が参加

若者の県外流出阻止や地域産業の持続的発展など地方創生の課題を考えるシンポジウムが二十三日、県庁講堂であり、県内の自治体や企業、大学関係者など二百人が参加した。三重大が地方創生に向けて、四月から新たなカリキュラムを始めるのを記念して主催。



要として、「プロデュース力や人的ネットワークを築いて地域経営ができる人材が求められる」と話した。

県内企業で働く男性は「三重県は中小企業が多く、社員は大企業のように一つの歯車になるだけではため。幅広い業務をこなせる能力が必要だ」と語った。

これからの三重県に必要とされる人材をテーマに、パネルディスカッションなどがあったの担い手となる人材を

写真。

「三重創生ファンタジ

パネルディスカッションには県内自治体の首長や企業の代表、三重大生が参加。南伊勢部の科学省の「地(知)町の小山巧町長は、一創生推進事業」に採択六次産業化などで付加され、県や県内の他大価値を高めることが必学、企業も連携する。

(添田隆典)

地(知)の拠点大学による 地方創生推進事業 (COC+)

地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成

キックオフ シンポジウム

三重県における地方創生を考える～これからの三重県が必要とする人材とは～

2016.1.23 ① 13:30 - 16:30

[会場] 三重県庁講堂

若年層の県外流出を食い止め、持続的な地域の活性化を推進しようとする COC+事業の展開に先立って、三重県における地域や産業の問題・課題は何なのか。いまとこれからの三重県では、地域活性化のエンジンとして、どのような人材が必要とされているのか。人材育成、地域イノベーションの推進に向けて大学を初めとする高等教育機関には、どのような役割や機能が期待されるのか。

これらについて理解を深めるとともに、認識を共有する。

入場無料

申込不要

定員 **200** 名

PROGRAM

(敬称略)

13:00~13:30 受付

13:30~14:00 開会の挨拶

三重大学長 駒田 美弘
三重県知事 鈴木 英敬 (ビデオメッセージ)
文部科学省 永田 昭浩 高等教育局大学振興課大学改革推進室 課長補佐

14:00~14:40 基調講演

「地方創生と COC+事業の意義と期待」
講師 納谷 廣美
前明治大学学長、大学基準協会特別顧問
地(知)の拠点大学による地方創生推進事業選定委員会委員長

15:00~16:30 パネルディスカッション

テーマ: 「三重県における地方創生を考える
～これからの三重県が必要とする人材とは～」

ファシリテーター: 雲井 純
三重大学地域活性化推進コーディネーター

パネリスト・・・(学識経験者) 納谷 廣美
(自治体) 鈴鹿市長 末松 則子、南伊勢町町長 小山 巧
(企業) (株)光機械製作所 代表取締役社長 西岡 慶子
万協製薬(株) 代表取締役社長 松浦 信男
(学生) 三重大学人文学部4年 山下 莉奈
三重大学生物資源学部4年 井上 瞬
(卒業生) NIT(株) 田口 秀典
(株)マサグループ本社 山本 豊

16:30 閉会の挨拶

ACCESS



最寄り駅

JR 紀勢本線 津駅 徒歩約8分

近鉄名古屋線 津駅 徒歩約8分

自家用車

国道23号線「県庁前」交差点を西へ入り
3つ目の左折。県庁駐車場をご利用ください。

編集・発行

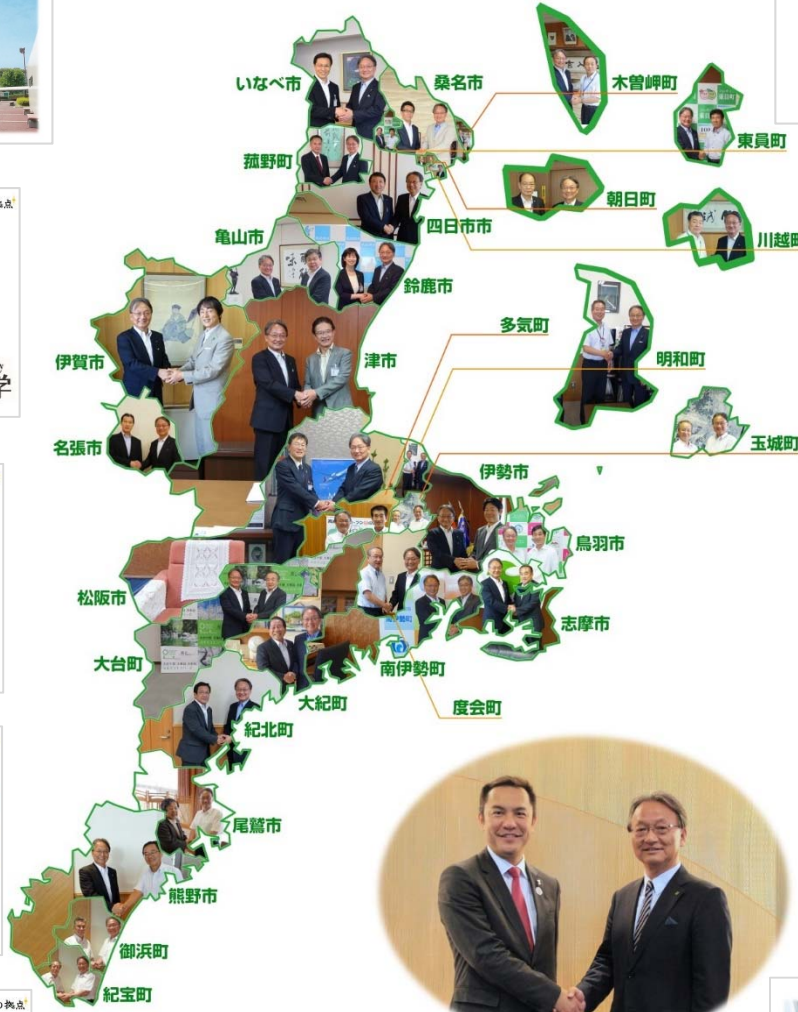
平成 28 年 9 月

国立大学法人 三重大学

地域創発センター (COC+担当)

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

TEL : 059-231-9407 FAX : 059-231-2354



オール三重体制で
臨む——